
D . D . D 日誌

津軽あまに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D・D・D日誌

【Nコード】

N2271W

【作者名】

津軽あまに

【あらすじ】

大規模オンラインゲーム エルダー・テイル の日本サーバにおける大手ギルド D・D・D。彼らの《大災害》前における平和な日常を描いた連作短編集です。橙乃ままれ先生作『ログ・ホライズン』二次創作SS。基本的に1話ごとに読み切り出来るように書いております。なお、本作には原作キャラクターの独自解釈等が含まれていますので、ご留意ください。

1冊目「三佐さん誤解される」

「1時方向、大規模集団、総数20オーバー、オール小型。3時方向、大規模集団、総数20オーバー、サイズ混成。8時方向、敵攻性部隊、総数8、飛行系中型魔獣4」
「班長、8時方向敵攻性部隊に新たに ミストエイブ 霧猿鬼 3体の存在を確認！ 《霧隠れ》です！ 戦力評価を2ランク引き上げるべきかとっ！」
「くそっ……本命を迂回させてきやがったか。ケダモノの癖に……」

錯綜する何名もの声。

彼らの周囲に敵は存在していなかったが、そこは確かに最前線の戦場であった。

人気MMORPG、エルダーテイルにおける、日本サーバー最大の戦闘系ギルド D・D・D。
彼らが今挑んでいるのは、フルレイド 中隊規模戦闘と呼ばれる集団戦闘である。

通常エルダーテイルでは、最大6人でパーティを組んで戦闘を行う。

だが、挑むクエストが大規模で困難である場合のために、このゲームには大規模戦闘レイドと呼ばれるシステムが存在する。

その参加人数は、中隊規模戦闘の場合、24名。

自由度の高さと緻密なシステムのおかげで、6名での戦闘ですら、状況を把握して有機的な連携を行うには相当の熟練を要するとされているこのゲームである。

24名戦闘で効率的な部隊運用を行うことは至難に近い。

眼前の「戦闘」^{ミクロ}には十全に対処できても、より大きな単位の「戦術」^{マクロ}、そして、大局的な「戦略」^{マクロ}まで勘案して動くことは、少なくとも一般的なプレイヤーには困難だ。

その問題を解決するために、D・D・D がとった対策が「頭脳の外在化」であった。

24名のプレイヤーたちが戦場の只中で「戦術」と「戦略」を考えながら「戦闘」を行うことが困難であるのならば、別の者がそれを担当すればいい。

戦闘はその場にいる者しか行えないが、戦い方を考えることは、そこにいない者でもできる。それが、彼らの発想だった。

念話システムによるリアルタイム音声通信と、魔法職共通の高レベル魔法である グレート・ディテクト・ライフ 広域生物探知 による位置情報や状態の情報の共有により、戦場にはない「頭脳担当者」が戦場の状況を把握できるようにし、「戦術」「戦略」を判断して現場に伝達、戦場の「肉体労働者」は純粹に目の前の敵に集中できるようにする。

この「頭脳担当者」を、彼らは「戦域哨戒班」^{フィールドモニター}と呼び、大規模戦闘には必ず随伴し、戦場から若干離れた場所から情報支援を行っていた。

当該部署の設置は、近代軍事活動における戦術データリンクを用いた効率的な指揮管理化と発想を同じくするものであり、見る人間が見れば、軍事的経験を積んだ玄人がその専門知識を趣味の世界へ大人気なくもち込んだものと思ったかもしれない。

「私語は慎みなさい。状況の説明を」

その部隊を統括するのは、まだ若い一人の女性だった。

キャラクターの造形は切れ長の目が涼やかな細身の体躯。

機能的なクローズ・アーマーに身を包み、周囲の班員からの情報を分析する姿は、戦記小説の参謀の類を思わせる。

班員を諫める端的な言葉は冷静で鋭利。一片の甘さも無い、抜き

身の刃を思わせる声。

「つ。1時方向、3時方向の大規模集団の敵種別を確認。いずれも緑小鬼の祈禱師^{ゴブリン・シャーマン}を中心に、緑小鬼^{ゴブリン}く系エネミーだけで構成されています」

戦域哨戒班において、情報伝達中には謝罪の言葉も余計な言葉。それを差し挟まない班員の返事に、女は鷹揚に頷いた。

「怯むな。想定範囲内です。主力部隊はそのまま1時、3時の周辺部隊から殲滅。しかる後に8時方向に進軍。狙撃班は8時方向に攻撃開始。敵の侵攻を遅らせる。遊撃班は8時方向に展開。20秒後、最近接状態になった回復班から回復支援魔術を受けた後に敵攻性部隊に突撃」

狙撃班のリーダーに念話を繋ぐと、女は事務的な口調で作戦を伝えた。

そして、僅かに口元を歪めると、念話を切る直前に、こう付け加えた。

「狙撃班長。今回は貴方達の狙撃精度が中隊を救う。訓練通りの戦果を期待しています。以上」

鋼の女、とも呼ばれる D・D・D の影の立役者。

さまざまな情報を並列的に聞き取り、分析し、判断する即応性は、他の追隨を許さない。

少なくともギルド外部のプレイヤーが想像したとおり、「戦域哨戒班^{ニター}」の設置と活躍は、彼女がその専門的知識と経験を趣味の世界へ大人気なくも持ち込んだ故のものであった。

「ふふ」

思わず笑いが漏れる。

この程度の情報処理と統率は、実際に彼女が日々経験しているリアルと比べれば、あまりにも容易い^{たやす}。

無意識の笑い声すら、班員たちに彼女への強い信頼を与える。

(……すげえ。この状況で笑ってるよ。この人、実際軍人だったんじゃないでござろうか?)

(噂じゃ、外人部隊にいたこともあるとかいう話だぜ)

(アーミーMAJIDE!?)

(センパイカツコイイっ)

十全な経験に裏打ちされた判断と挙作。

ただし、それは彼女が、皆の噂するどおりに現実^{リアル}で自衛隊や軍隊、傭兵といった軍事的経験を積んだゆえの能力ではない。

(……ひよこ組の子たちに目を配るのに比べれば、この程度の規模なら、敵味方の動きを把握して、対応策を練るなんて楽なもんですよ。あつちは行動の目的もパターンも理解^{イレキユラー}不能ばかりなのですから)

ただ、幼児相手^{モンスター}に日々奮闘する現役保育士^{ソルジャー}さんの、経験と勘によるものなのであった。

(あー。あの子たちも、こんなにお行儀よく行進してくれれば、運動会も楽なんですけど……)

進軍する味方の様子をモニターしながらため息をつく彼女の名は、

高山三佐^{みよ}。

(……それにしても、みんなが私のこと、怖がってる感じがするのは何ででしょう。さっき、キツク言い過ぎたかなあ。うう。集中してるとぶっきらぼうになっちゃうんですよね。気をつけないと。せっかく最近可愛いあだなもつけてもらったり、徐々に親しまれてきたみたいなんですから！)

誰が呼んだか、ついたあだなは「三佐^{さん}」さん。

その理由が、プレイヤーの経歴に関する盛大な誤解にあることを、彼女は知らない。

まして、三佐が軍や自衛隊における参謀役を指す階級であることなど、軍事的知識が皆無のうら若き女性が、知る由もないのであった。

1冊目「三佐さん誤解される」(後書き)

キャラクター紹介

高山三佐(吟遊詩人LV90)

超大手ギルド D・D・D の中堅メンバー。

じつと相手を睨む癖と淡々とした口調で「怖い人オーラ」を無意識に発してしまう損な体質。

2冊目「ユズコさん質問する」

「なあ……オマエ、最近班長級でレイド参加した？」

「ああ。したぞー」

「いつのレイド？」

「新皇の帰還祭関連」

「つてことは……」

「超大规模^{レキオン}レイド。精鋭ぞろいで楽しかったぜ」

「いいなあオイ」

「さすがに狂戦士殿下まで引つ張り出されたからなあ」

「クラスティさん前線出たのか。あの人もチートっぷりが激しいよな」

「そのうえ、だ。生三佐^{なみぞ}さんの生指示を生拝聴したぜ」

「マジで!？」

「マジもマジ。激マジ。あの人^{つひ}つて都市伝説^{でんせつ}じゃなかったんだな」

「それで、どうだった、噂通りの、その、なんだ。アレなのか？」

「すっげーの。俺マジで最前線の一兵卒になったかと思つた。余計なことは何も言わないしへたれた動きすると容赦なくダメ出ししてくるのに、最後で『期待しています』とか言われるともうツ！」

「小洒落たミリゲールのオペレーターかあ!!」

「そのうえマジクールボイス。ののしられてえ!つてファンの気持ち^{ちが}わかるわ」

「聞きてえなあオイ！」

「『作戦中、皆さんの命は私が預かります。質問、反論は許可しません。これは決定事項です』つて最初にいわれただけどよ。これがもー鳥肌もの」

「つてか、ボイチャでそれつて、リアルプロ声優とかじゃね？」

「台本とかねーし、あの人が作戦判断してんだろ？ 正直、かなり戦いやすかったし……マジで、ミリタリー関係のプロとかじゃないか？ そもそもこの部門を提案したのもあの人だってーし」

人気MMORPG、エルダーテイルにおける、日本サーバー最大の戦闘系ギルド D・D・D。

フィールドモニター 戦域哨戒班統括者として頭角を現した女傑、高山三佐^{みさ}。

通称「三佐さん」。

彼女こそ、現在の D・D・D 内で最も頻繁に話題に上る存在だった。

固定メンバーパーティでの冒険が多かった彼女の人となりを知るプレイヤーの数は少ない。

その素顔を知るのは、ギルドマスターのクラスティ、最近出沒率が減少してきた古参プレイヤーであるジンガー兄妹や、彼女の姉貴分である「先輩」くらしいものである。

そんな今まで表舞台に立つことのなかったプレイヤーが一転、戦域哨戒統括班の設立から、多くのメンバーの前にオペレーターとして姿を現すこととなったのだ。

しかもその指示が的確、迅速、明快であるとすれば、これは興味を持つなという方が無理な話である。

しかし、当の本人は……

「……へくちっ」

戦場哨戒班待機室で、高山三佐は小さくくしゃみをした。

「誰かが噂を……なんてはずもないですよ。風邪……寝不足ですかね……」

（（自分が時の人って自覚ゼロだよこの人！？））

その独白に、周りで過去の戦績データをまとめていたプレイヤーたちが心中で総ツツコミを入れる。

類まれなる情報分析能力を持ちながら、高山三佐という人間は、人一倍噂にうとい人間であった。

クラスに一人はいる「噂話が最後に回ってきて、噂が耳に入る頃にはすべてが賞味期限切れになっている」タイプ。

生真面目であるがゆえに周囲が遠慮して、軽い噂が流れていかないのである。

「ミサセンパイっていつも落ちるの早めですけど、お仕事、朝早いんですかー？」
ロケオフ

そんな中、班員の少女が何気ない様子で問いかけた。

ユズコ。

ギルドに入ったばかりのルーキーながら戦場哨戒班に立候補、三佐の試験をクリアして正式な班員として活動している変わり者の少女だった。

一瞥されようならば大の男も沈黙し、一声かけられれば言葉を詰まらせる鋼こがねの女を相手にその反応は、屈託くつたくがないのか何も考えていないのか。

（切り込んだー！？）

(三佐さんの無駄話すんな的オラ空気読めないのかコイツ！)
(いやむしろよくやった！ 骨は拾ってやるからこのまま三佐さんの情報引き出せこのルーキー！)

班員全員が一斉に作業を中断して聞き耳を立てる。

「そうですね。朝は早いですし、寝不足で注意力散漫になるうものなら生き死にに直結する仕事ですから。あまり夜更かしはできません」

()(いきなり淡々と修羅場職業発言キター！？)()

「おおー。大変なのですね？ 意外です。もっとおおらかな仕事だと思ってました」

()(意外とかないだろ！ 当然だろ！！ っていうかよくそんな物騒台詞をさらっと流せるなオイ！)()

コキョートス 絶対零度の声と物騒ムスベルヘイムな内容のコンボを意に介さず、会話を続ける少女。

その空気を読まないマイペースっぷりに、班員達は戦場しやうのパイナツプルうだんでキャッチボールをする子供を連想した。

だが、意外にもパイナツプルさんやんは爆発することなく、班員達の息を呑む音をBGMに会話のやりとりは続いていく。

「ええ、明らかに肉体労働者でしょう。生傷の絶えない職場ですからね」

()(やっぱり戦場だ！ 戦場だよっ！ ってか兵士って究極の肉体労働ですよー！)()

「でも、素敵じゃないですか。センパイの仕事って、かつこいいイメージですけど。やっぱり実際やってみると理想と現実は違うので

す?」

「(ノンシークタイムで普通の返事だ!)(」

「世間一般に言われるほど綺麗な仕事じゃありませんよ。汗と泥にまみれた毎日です。3Kですね」

「(しかもすっごいリアルな返事キター!)(」

「うぐ、ナマナマシイのです。そんなだと、やめちまえー!と
か思いませんか?」

「……それでも、未来を守る仕事、という自負もありますからね。
辛くても、やりがいがありますよ」

「(……確定だ。マジ兵士の人だ。多分自衛隊とかの人だよこの
人! G・I・ジエーン系!)(」

「大人の女のセリフだ! あーあ、わたしもセンパイみたいになり
たいなあ」

「まあ、今日みたいに組同士の争いを仲裁したりしていると、そん
な奇麗事も吹き飛ばわけますけど」

「(……つて、組? 争い? ウソ、まさかのそっち系?!)(」

「あー、秋はシーズンですから。会に備えて足並みを揃えないとい
けないのに大変ですねえ」

「(……ちよつとまでユズコ〓サン何ナチュラルによくあること
ですね的な返ししてるの!? ソーカイ〓ヤー的なアレって、うら
若きお嬢さん二人のゲーム内会話としてどうなのよ!)(」

「秘蔵のオハジキを隠された子が暴れたときには、どうなるか
と思いましたけど。何とかかなりそうですよ」

「(拳銃^{ハジキ}deathとー!)(」

「おお! 大事にならなくてよかったですねえ。お勤めおつかれさ

「まです！」

((((…… OK。三佐さんの経歴を探るのは、やめとじつ。あと、ユズコのもな)))

ひそひそばなし
「プライベート通信で班員たちがそう結論づけた、その瞬間。」

「しかし、大変なんですなえ、保ほ育いく士しさんって」

((((…… え?)))

「今日一番の、空し気よ読げまきない発言が、班員を今度こそ、完全なる思考停止に追い込んだ。」

2冊目「ユズコさん質問する」(後書き)

キャラクター紹介

ユズコ(召喚師LV35)

D・D・D に最近入ったばかりのルーキー。

三佐さんの「怖い人オーラ」が効かない稀有な人材。

周囲の空気は読まないのか読んでいないのか不明。

3冊目「クラスティさん傍観する」

人気MMORPG、エルダー・テイルにおける、日本サーバー最大の戦闘系ギルド D・D・D。ハードコアなゲーマーからライトなニュービーまで幅広いメンバーの集う、ゲーマーたちの巣窟。

普段ならば特定の仲間同士ではばらばらな話題を繰り広げている、そのギルドメインルーム。だが、今日だけは違った。

「保育士MAJIDE!？」

「そんなっ?! 俺の脳内三佐さんはフランス外人部隊で幾多のダイティミッションをこなす最強のワンマンアーミーだったのに!」
「全あつし会議の結果では、公安調査庁所属のクールな女スパイでげした!」

「いや、マイエア三佐さんはこの国を守る最前線に詰めていて、シヤバに出られないうっぷんを、寮からネットゲ接続してひと時の癒しを得ている寂しい熱帯魚!」

「はっはっは。引つかかったな貴様ら! 三佐の装備の軍服ぽいコーデイネイトをお勧めしたの俺ですぜ! さすがに海外データのどさまわりはとうぶんしたくないZE!」

「なんて釣り! チクショウリアルでそうでなかったとしても、この壊れちまった幻想は綺麗だったんだ! その想いは決して間違いないんじゃないんだから……っ」

「落ち着けみんな! まだあわてるような時間じゃない! もしもボックスを探すんだ! お客様の中に青いタヌキを飼ってるメガネっ娘はいませんか!？」

「テメエが落ち着け！」

「ホイクエン補逝園……まさか、そこに勤めている女が現在もいたとはな」

「知っているのかサンボルさん!?」

「それは捕まった者たちがごとく逝くという、禁断の園。そこへ踏み入った者は、二度と外を見ることがない……民明書房の『本当は怖い幼児教育』に載っていた。あと誰がサンダーボルト体重65トンか」

「解説大往生ハゲ乙」

「保育士……三佐さんシヨタ萌えだったんですか！ ショック！」

「いやむしろロリ萌えという説も」

「ロリ萌えMAJIDE!?」

「おねろり……アリですな！ モハメドですな！ 舞え、俺の妄想

よ、蝶のように！」

「ねエよ！ ってか、三佐さんほんにんいないからって言いたい放題だなテメエら！」

フィールドモニター戦闘哨戒班班長、高山三佐。

その的確な指揮と、状況判断能力、そして、戦闘哨戒部門の設立を提案したというエピソードから、軍事関係の職業についていると噂がまこと実しやかに囁かれていた女性。

そのイメージで、ついたあだ名は三佐さん。

そんな彼女の、真の職業が、他ならぬ戦闘哨戒班のメンバーから語られたからである。

保育士。

児童福祉法第十八条の四曰く、「都道府県の備える保育士名簿に登録し、保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者」をいう。

まごうことなく児童福祉法において規定される、名称独占の国家

資格である。

職場は、主に保育所や児童福祉施設。

その現場の苛烈さを戦場に例えることは多いが、間違っても周囲のメンバーが噂していたような硝煙や鉄の匂いがはびこる血みどろの空間ではない。

そのギャップが、ギルドメンバー……特に実際に指揮を受けたことのある者にとっては衝撃であつたらしい。

混乱し錯綜する言葉の中で、D・D・Dのギルドマスター、クラスティは平然と先の大規模戦闘の結果について副官の一人から報告を受けていた。

クラスティに報告をしていたのは、ソーサラー 妖術師 リーゼ。

D・D・D 構成スタッフの中では新参だが、そのプレイテクニクと面倒見の良さから、メンバーの大規模戦闘参加機会の管理やパーティの編成、新人育成などを中心に担当している女性プレイヤーだった。また、個人的にクラスティの副官役も買って出ている。

「ファンタズマル 獲得幻想級『新皇の武具』は2つ。現状で獲得可能な『新皇の武具』は3種ですから、この戦いシリーズは今のところ、D・D・Dわれらが制したと言つてもいいでしょうね」

「1つはソウジロウ君のところか。急造ギルドかと思つたが、存外やるものだな」

「西風の旅団の制した戦いは、最終戦の前哨戦。クライマックスに備えて我々が戦力を温存した結果です。負けとは言えませぬわ、御主人様ミロード。むしろその戦力配分をどこからか聞きつけて一点突破してきた西風が、火事場泥棒に乗り込んだようなものです。はしたない」

「その判断もまた、実力だろう。彼の、というより、そのブレインのだろうけれどね。やはり、あそこには面白い人間が集まっているようだな」

「随分とあの女たらしを評価していらっしやるのですね」

「彼の経歴を知っているかい？ 剣豪將軍の弟子にして、はぐれ神官の相棒、腹黒眼鏡の弟分。獵犬の牙にして茶会の申し子。意図せず様々な人間と繋がり、味方につけていく能力は貴重だよ。リーゼ、僕らのように、思考が先に立つ癖のある人間には特に羨ましい特質じゃないか？」

「……高山三佐も、そういう人種だとおっしゃりたいのですか、御主人様」

リーゼは、肩をすくめる独自アクションをアバターに取らせつつ、ため息をつく。

キャラクターが向き直った視線の先には、二人をよそに加速していく、ギルドメンバーたちの三佐さんトークが展開されている。

「みんな！ 考えてみる！ 確かにリアル軍人さんでなかったのは残念だ！ だが！ 想像してごらん！ はなまるエプロンをつけて子供相手に無理難題を言われて困っている三佐さん！」

「おおおおおお！」
「想像してごらん！ お絵かきの時間に、どこからどう見てもこれクトゥルフ系の眷属じゃね？ 的な似顔絵を『せんせーかいたお！』って言われて、困った笑顔で『ありがとうございます……』って言うてる三佐さん！」

「おおおおおおおおおお！」
「さらに想像してごらん！ お昼寝の時間中、寝相悪くてへそだしてる子に、しょうがないなあ……って感じにくすり笑いなながら、タオルをなおしてあげる三佐さん……！」

「おおおおおおおおおおおおおお！」
「俺も子供をつれて三佐さんのいる保育園へ行きたい！」

「子供どころか、彼女もいねエよな teme」
「むしろ保育園からやり直したい」

「心は今でも幼児ですっ」

「オ、オレの子供をぶげらっ!？」
「俺も園児になって一緒にお昼寝したい……」
「そんな園児シジイがいるかア！」
「そつと毛布をかけ直してもらいたい……」
「一緒におやつ食べたい」
「隣でオルガン弾きたい」
「むしろオルガンになって弾かれない」
「むしろどん引き」
「むしろロードローラーに轢かれてしまえ！」

クラスティは喉の奥で軽く笑い声をあげると、眼前で不機嫌そう
なリーゼに声をかけた。

「気に入らない、つて顔をしているね」
「べ、別にそんなことはありませんわ！　ただ、私は高山三佐の存
在がギルドの規律を混乱させている事態を憂慮しているだけで……」
「もしも自分が戦闘哨戒班の班長だったならば、こんな混乱は許
さなかつた』……違うかな？」

まるで静かな庭先で談笑をするような気軽さで、クラスティは口
にした。

「狂戦士」とあだ名される ガーディアン 守護戦士　クラスティ。
戦いの最中こそ、端的な単語しか発言せず、全てを敵の駆逐に振
り向けるウォーモンガー。

だが、平時の彼は、徹頭徹尾穏やかな、そして、底の読めない好
青年であった。

リーゼにしろ、クラスティにしろ、あくまで互いに目にするのは、
アバターであるキャラクターだ。

だから、感情は入力しない限り表情や動作に出ることはない。

けれど、ボイスチャットでリアルタイムにやりとりができるコミュニケーションは、正直だ。

言葉に詰まったリーゼの沈黙が、そのまま彼女の思いを代弁する。

「そ、それは、その……」

「君に新人担当を任せしたのは、その方が適任だと考えた私の判断だ。それが君にストレスを与えているなら、謝ろう」

「そ、そんなつ。頭をお上げ下さい御主人様！ 謝っていただくことなどありませんわ！」

慌ててキャラクターを右往左往させるリーゼ。

その様子を見て、クラスティは真面目くさった口調で言葉を続けた。

「そう言ってもらえると気が楽になるな。……それに、アレは混乱でもあるが、ギルドの連帯感を醸造しているとも言える。私に免じて、少しは目を瞑ってやってくれないか、リーゼ」

「そ、その……クラスティ様が、そうおっしゃるなら……」

誰か一人でもこのやりとりに注目していたら、「爆発しろ」コールが巻き起こりかねない点描が舞いそうな雰囲気。

だが、幸か不幸か、ギルドルームの三佐さんトークのボルテージは最高潮に達しており、誰もクラスティの巧みな思考誘導と、それにまんまと引っかけかかっている乙女めがねに気付くことはなかった。

「ああつ、三佐てんでーにオシオキされたい！」

「OSHIOKISEよ！ OSHIOKISEよ！」

「ばかめ、おまえらができもしない入園の夢を貪ってる間に俺は同僚という地位を手に入れてやる……っ！ これから古本屋に保育士入門書を買いにいってくるぜ！」

「俺は経営権を買収する方向で！」

「知っているか？ 保育士はオルガンが弾けないとなれないんだぜ？」

「問題ない、俺には調理師免許がある。つまり、これで給食のお兄さんというわけだ」

「残念だったなっ。給食のお兄さんになるには、栄養士の資格もいるのだよっ」

「OK・三佐のっばい保育園検索終了。対象を10件まで絞った。希望者笹PLZ」

「特定イクナイ」

「その情報処理能力を別の方向に生かせよ戦闘哨戒班ッ！ ってかそれ以上やると垢BANなりかねねエだろうが！」

「よし従兄弟の娘を入園させよう。そして俺が保護者代理に」

「……あ、あれこれ……ちょ、おま、しゃれにならしょ。10分の1でウチのアレががががお世話にiiiiiiiiiiii!？」

「よし。少々時間はかかったが、三佐さんの3Dモデルを保育士っばいエプロンにコラしてみた」

「さんさんのMMMDつくったお！ 三佐さんがミテルだけ【MMD】」

「早エなオイ!？」

「現在、次回作、『【MMD】甘えんぼうの三佐さんが可愛すぎてレイドに出撃できない』、『【MMD】三佐さんが踊ってくれました【例の童謡】』作成中だお」

「GJ! GJ! GJ!……!」

「ZIIPクレ」

「全部(・・)クレ!」

「ほしい奴はアドレスと次のレイドのロット権をよこさ「死ね!」

「死ね!」「死ね!」

「あ、じゃあ、次はリアルに着てもらおう三佐に。むろんエルダーテイルで」

「テムエ本人の前でその台詞が吐けるのか？」
「はっはっはっ。できる訳ないじゃないか！」
「さわやかに言い切ったよコイツ！」

会話の盛り上がりが最高潮になった瞬間。

接続している全員の画面隅に、メッセージが浮かんだ。

ギルドルームに 高山 三佐 が入室しました

瞬間。

水を打ったように静かになる一同。

そこに、歩を進めていく、高山三佐。

まるでモーセが海を割るように、無言のプレイヤーたちが道を開ける様は圧巻ですらあった。

「……こんばんわ、みなさん。随分、直前まで盛り上がっていたようですが」

感情のこもらないハスキーボイスが、静まり返ったルームに響く。

「何か、私に聞かれては問題のある話でも？」

ギルドルーム内の体感温度が、正確には、そこに接続しているプレイヤーたちの精神的体感気温が、数度下がる。

ぎぎぎ、と、ぎごちなく、全員の視線が、ギルドマスターのクラスティへと集中した。

「隊長。^{ミロード}差支えなければ、どういったことか教えてもらえますか？」

多少の雑談なら問題ありませんが、一瞬間こえた先ほどのそれは、少々その度を過ぎたように思います」

クラスティは先ほどの会話には加わっていない。

つまり、共犯者ではない以上、彼らを庇う必要などありはしない。絶体絶命。

全員が息を飲む、その中で。

「いや、なに。ここにいる娘さんのことで、少し盛り上がりすぎていただけだよ。最近の彼女の活躍は目覚ましいからね」

クラスティは、脇にいるリーゼの方を向いて、何ということもないように言い切った。

突然話を振られたリーゼとしては、硬直する他ない。

色々と反論は浮かぶが、敬愛するクラスティの言である。もごもご言いながら、結局意味のある単語は紡げなかった。

それをどのように解釈したのか、三佐は盛大にため息をつく。

「……だいたい理解しました。リーゼさんが魅力的なのは同性の私も同意するところですが、好きな子を困らせて喜ぶのは幼い子供までで十分です。謹んでください。あと、隊長ミロード。貴方は物事が面白そうな方向に転がりそうだと、悪ふざけも意図的に見逃す悪癖がある。それは、ギルドマスターとしてどうかと思います」

「ああ、忠告、痛み入るよ」

全く悪びれることもなく言い切るクラスティに、ギルドルームの全員は心中で深く深く頭を下げたという。

クラスティさん、三佐さんネタを傍観する。

この事実は瞬く間にギルドに広がり、一部ギルドメンバーのテン

シヨンを沸騰させることになるのだが、それはまた、別の話である。

3冊目「クラスティさん傍観する」(後書き)

キャラクター紹介

クラスティ(守護戦士LV90)

D・D・Dのギルドマスター。

美声と落ち着いた物腰から、女性プレイヤーの人气が高い。

だが、いざ戦闘となれば苛烈な戦いを好むウォーモンガーであり、その筋の男性プレイヤーからも、頼れる兄貴分としての信頼を得ている。

唯一の弱点は、完璧すぎて紹介文がつまらなくなるところ。この完璧超人さんめ！

4冊目「リーゼさん八つ当たりする」

人気MMORPG、エルダー・テイル。

1人でのソロプレイあるいは6人でのパーティプレイ冒険が基本であるこのゲームで、今、2人のキャラクター冒険者が戦闘を繰り広げていた。

画面を覆いつくす巨人達の群れ。

巨人系モンスターが跋扈することでも有名な「古戦場セキガハラ」。その中でも、最奥ゾーンであるここ、「西武卿の本陣跡」に現れるエネミーの数は群を抜く。

押し寄せる湖沼巨人グレンデルら巨人の群れを見据え、

「ああもう！ なんなのよあの能面女ツ！ せっかくクラスティ様といいところでしたのに！」

まったく戦況とは無関係な叫びを上げると、女は天高く右手を掲げた。

その五指の先端それぞれに、赤熱する光球が具象化する。

それは、瞬く間に煮えたぎる溶岩の塊へと形を変え、それぞれがゴルフボールほどの大きさになる。

「絶対アレ、ギルメンの中にスパイか何か仕込んでいて、私がクラスティ様に近づくと乗り込んできているに違いないですわ！ そうに決まっていますっ！」

「いや、それは絶対被害妄想だろオが！ ってかギルドルームのど真ん中でいちゃいちゃしてりゃ、邪魔も入って当然だろツ！」

連れのツツコミを黙殺し、女は手を振り下した。

それを合図に、五つ赤熱する溶岩の弾が、敵の集団の中を縦横無尽に駆け巡り、蹂躪していく。

紅色の軌跡はまるでガラスに走る亀裂めいた鋭角な軌道。

五つの弾丸はビリヤードのように、10体の湖沼巨人^{グレンデル}の巨体の間を疾駆し、次々と強大なダメージを与えていった。

フィンガー・オブ・ラーヴァ。

魔法攻撃職の中でも最大の攻撃力を持つクラス、^{ソーサラー}妖術師 を象徴する攻撃魔法である。

高い威力と、密集した複数の敵に対して同時に攻撃を行えるという特性に比して、詠唱時間も再使用規制時間も少なく、優秀な特技であった。

エルダー・テイル の特技は、会得、初伝、中伝、奥伝、秘伝の順に、アイテムやレベルアップで獲得できる習熟ポイントで成長させることができる。

フィンガー・オブ・ラーヴァ は、その成長に応じて繰り出せる弾の数が増加する特技であり、全ての指から射出できる彼女はそのまま、この特技を秘伝級まで成長させていることを意味していた。秘伝級といえは、大規模戦闘級のコンテンツをクリアした報酬アイテムを使用して初めて至ることのできるレベルである。

そのエフェクトは奥伝のそれとは大きく異なり、多くのプレイヤーの憧れの的となる成長段階だ。

魔法を解き放ったのは、金髪のハーフアルヴ。

ほっそりとした四肢に、長身。すらりとした身体のライン。

衣装が衣装なら、ファッションモデルを思わせるスレンダーな体型を、豪華なローブで包んでいる。

日本サーバ最大の戦闘系ギルド、D・D・D ^{スタッフ}の中核メンバー、リーゼであった。

「つていうかこの馬鹿っ！ いきなし暴走すんな！ まだ奴ら、俺が引きつけてねエだろ！」

強力な範囲攻撃に反応し、巨人達の敵愾心が上昇する。

エルダー・テイル においては、エネミーの行動を決定付けるシステムに敵愾心という概念が存在する。

強力な攻撃、戦況を覆しうる回復行為といった行動を行ったキャラクターに対して、エネミーは敵愾心を募らせ、優先的に攻撃を集中させるようになるのである。

その原則に従い、10体の湖沼巨人達が、リーゼに向かって殺到していく。

「ああもう言わんこつちやねエ！」

「んなことわかつてますわ！ 数分は持ちます！」

「アホか！ 装甲紙職がグレ様10体相手つて即死コースじゃねエか！」

「接敵範囲の限界で実質4体！ いけますわっ！」

実質4体。

リーゼの発言は、エネミーのスペースと攻撃パターンを勘案した上でのものだった。

湖沼巨人は、攻撃力は大きいものの、拳による近接攻撃しかしてこない。

相対的に小柄な冒険者を取り囲み、同時に殴ることができるのは、4体が限界なのである。

また、リーゼのサブクラス 軍師 による特技 戦術予報 は、湖沼巨人の戦術ルーチンが「愚鈍」に属することを読み取っている。

融通の利かないこの巨人の思考パターンでは、「ヘイト値が高い敵を殴ることができないから、攻撃目標を別に切り替える」という

的確な判断ができないのである。

つまり、残る6体は、リーゼに攻撃を加えることができず、その周囲をうろつくと動き回ることしかできないのだ。

「だとしても 妖術師^{ソーサラー} が囷とか無茶だろ!? この本気お嬢め!^{むてっつぽっ}」

「それが判っているなら早くなさい! 目標^{モノアイヘッド} 一眼巨人 ! 削りの目安は3割で!」

「くっそ、ただ死にすんなよ! 俺一人でこんな巨人とガチムチパラダイスとか絶対無理だかな! 誰か! お客様の中にツナギの似合ういい男はいませんかチクショー!」

「うっさいボケ! いいから落ち着いて指示通りにやんなさいっ! ……ですわっ!」

「わーったよ! あとテメエは落ち着けとか鏡見てから言えーっ!」

同行している 武士^{サムライ} に端的に指示を出すと、リーゼは新たな特技を行使する。

インパティエンス・ボルト。拳大の光球を術者の周囲に漂わせる魔法である。

この光球は、術者に近接攻撃をヒットさせた敵に反応して雷撃を放ち、反撃ダメージと、一時的な「行動遅延」のバッドステータスを与える。

湖沼巨人の豪腕によるダメージは大きいが、攻撃速度は遅い。これで、多少は持ちこたえることができる。

感情は高山三佐への苛立ちで占められているものの、リーゼの思考は冷静だった。

感情的になりがちな傾向はるあが、捨て鉢はリーゼの好みではない。十分な勝算があるからこそ、2人でこんな戦場までやってきたのである。

リーゼには、己の戦術判断能力に対する自負がある。

実のところ、D・D・D 戦術哨戒班が設立されたときには、まず自分がその班長に選ばれるものと思っていた。それだけの努力はしてきたつもりだし、実績もあつたはずだ。

様々な巡りあわせで、結局はその座を高山三佐に奪われはしたが、それは決して自分が高山三佐に劣るからではないと、リーゼは思っていた。

「……ううううう、やっぱり能面死すべしーっ！」

「あああやっぱり私情人りまくりだよ！ テメエが冷静だとかぜってエ信用できねエ！ このお嬢サマとサシでの稼ぎは何でいつもこんなんだよっ！？」

エネミーに囲まれている以上、殴られて詠唱が妨害されるような大魔法は使えない。

殴りかかってくる敵を1体「行動遅延」にする度に効果が消滅するインパティエンス・ボルトを再発動しながら、リーゼは連れの武士サムライに目をやった。

武士サムライが攻撃しているのは、湖沼巨人グレンデルではない。より高レベルのエネミーである一眼巨人モノアイヘッドだ。

湖沼巨人より数割増しの攻撃力とHPを持ち、「岩投げ」という遠距離攻撃能力も持っている。

リーゼが一眼巨人を連れに任せたのは、この遠距離攻撃を警戒したからだった。

武士は一般に防性クラスと言われる前衛職に括られるが、再使用規制時間の長い強力な特技を連発することで、短時間だけならば武器攻撃職並みのダメージ効率を確保することができる。

「ほら！ キリキリ動きなさいっ！ 取り分50%に戻しますわよっ！」

「クソッ、人使いが荒いなオイ！ 7割もらつても足りねエよッ！」

文句を言いながらも、見る間に 武士 は 一眼巨人 達の中で舞うように二刀を振るう。

仮にも、数多いギルドメンバーの中でリーゼが選んだプレイヤーである。

岩投げと殴りの射程距離の境界を前後することでモーションに入りにかけた行動を無効化しつつ、最低限の被害で攻撃を積み重ねていく。

「で、ここからどうするつもりなんだよ、お嬢！ まだ数の優位はひっくり返らねエだろうがッ！」

一眼巨人 5体のHPを均等に削りきったところで、声がかける。

リーゼは視線を周囲とパラメーター画面に移す。

自分の残りHP 4割。行動遅延状態の巨人は、自分を包囲している者のうち3体。

4度目の インパティエンス・ボルト 。振り下ろされる4体目の拳。削られるHP。残り2割。

そして、4体目の 湖沼巨人 のステータスに、行動遅延の文字が追加される。

そこまで目で追った時点で、リーゼは次の指示を出した。

「次、 旋風斬り・怒涛 ！ 一眼巨人 を全部私の方へ寄せて！ 今から本命の詠唱を開始しますわ！」

旋風斬り・怒涛 。

武士 の特技の中で、広範囲に同時に攻撃を加える 旋風斬り から派生した技である。

ダメージ自体はひどく低いが、その特性は 旋風切り 系の中で

も随一の攻撃範囲と「敵を吹き飛ばすことができる」点にある。

「マジか?! 巨人集めて逆ハーレムってどんだマニアックなんだよお嬢!」

「黙れバカーっ! 早くしろって言うてるでしょ! ……ですわっ!」

軽口を叩きながら 武士 が敵の背後へと回り込む。

そのまま、刀を振るう。 旋風斬り・怒涛 の、青い光のエフェクトが眩しい。

放たれた輝く衝撃波が、 一眼巨人 5体をまとめて、リーゼの方向へと押し出し、障害物である 湖沼巨人 にぶつかって止まる。かくて、10体の 湖沼巨人 と5体の 一眼巨人、このエリア全てのエネミーが、リーゼを核とした団子状に配置された。

その間に、リーゼの詠唱は完了している。

グレンデル4体に入れ代わり立ち代わり殴られれば、妨害されてしまいかねない長さの詠唱。

しかし、インパティエンス・ボルト によって行動遅延状態となった巨人では、この詠唱を止めることはできない。

リーゼが地に掌を突くと、その点を中心に、白い輝線が地面を駆け巡った。

乾いた水路を流れる雨水のような速度で展開される光。

アラクニッド・ネスト

移動阻害系の魔法で、術者を中心とした一定範囲に対して、敵味方の区別なしに移動不能の影響を与える癖の強い特技である。

紙同然の装甲である 妖術士 が敵に接近しなければ使用できないこと、敵味方の識別ができず効果を発揮することからいわゆる「残念特技」に括られることの多い特技だった。

しかし、効果時間はその他の移動阻害系魔法と比べて3倍近い長さを誇る。

立て続けにリーゼは次の詠唱を開始する。発動する魔法は マナ・チャージアタック。

自身が魔力の塊となって、敵へと突撃する、妖術士には珍しい「移動と攻撃を同時に行うことのできる特技」。

与えるダメージは微々たるものだったが、彼女はその効果を使用して、足止めを受けた巨人たちの包囲網を潜り抜け、武士の隣へと移動した。

視線の先には、まだしばらく足止めを受けて動けない巨人の群れ。遠距離攻撃が可能な一眼巨人は、武士の攻撃を受けてそちらへと敵愾心が向いているため、そう簡単にリーゼへは投石攻撃が向かってくることはない。

近距離攻撃しかできない湖沼巨人に至っては、もはやただの的である。

「つまりは、こういうことですね」

「倒す前からドヤ顔すんな。敵を倒すまでが戦闘だろうが」

そのツッコミは癪だったが、事実であるので仕方がない。

なにより、今日の前には、リーゼが待ち望んだ絶好の「八つ当たり対象」がある。

「そうですね。それじゃあ、巨人さん……思う存分、私のストレス解消に付き合っていたくださりましょうかっ!!」

かくて、一方的な蹂躪が始まった。

「ああ、あの鉄面皮泥棒ネコ！ 秘伝ネコ五枚かぶり！ いつもいっつも私の出番を横取りしてっ。なんてはしたないの！ 恥知らずー」

っ！

「だからテメエが落ち着けこの瞬間湯沸かし器娘！」
ティファール

轟音。

「誰が娘ですか！ 私は大人の女ですわ！」

「だから頭冷やせつての！ そんなんだから、三佐さんに出番奪たちはわれるンだよ！」

閃光。

「う……うっさいバカお黙りなさいー！ アンター応うちの副班長でしょっ！ 一体誰の味方なのよーっ！ ひぐっ」

「マジ？ 泣いたか？ 泣き入ったのかくそ、言い過ぎた悪かったから攻撃に集中してくれお嬢さん！ ってかそろそろ足止め時間切れるンですけどっ！？」

振動。

「な、ななな泣いてなんていませんわよ！ 私は大人の女なのでから、別に、これっぽっちも、悔しくなんてないんですからね！」
「クラスメート相手に『そのロールプレイ』を貫くあたりは尊敬するよー！」

「アンタが エルダー・テイル やったことがイレギュラーなんですよっ！ 今の私はリーゼなんですからっ。なんですったら、なんですからーっ！」

「わ、わかったから！ 俺の方に向けて魔法発動するのはやめろーっ！」

「高山三佐のばかー！ クラスティさま愛してるーっ！ あと、何で私が戦闘哨戒班になれないのですかーっ！」

「うあー、絶対班員連中に聞かせらんねエ今の台詞！ っていうか、今夜中だろ！ そんなに叫んで家とかご近所さんに怒られねエのか
テメエ！！！」

「問題ないのです。ピアノの練習部屋ですから、防音設備は完璧ですわっ！」

「ぎゃー！ さらりと言いやがったこのブルジョワジー！ こっちはテメエにツッコミ入れるたび隣の部屋の姉貴が『うっせエ明日朝番だから寝かせるコラ』って壁ぼこすか叩いてきていつベルリンの壁がペネトレイトするか死の綱渡り状態なのによっ！」

かくて、一帯を焦土にする勢いで放たれた長距離爆撃により、巨人たちは殲滅され。

「……あー。ほんのちよっぴりだけ、すつきりしましたわ」

「……そうすか。そいつはよかったツすね……」

八つ当たり作戦に成功したリーゼさんの横で、喉を嚔らした武士^{コミ}の少年は力なく言葉を絞り出した。 武^ツ

4冊目「リーゼさん八つ当たりする」(後書き)

キャラクター紹介

リーゼ(妖術士LV90)

D・D・Dの中核スタッフメンバー。

キャラクターは長身でモデル体型のハーフアルヴの美女。

頭の回転は速いが、感情的になりやすい性格で思考がオーバーヒートすることもしばしば。

普段はお淑やかな令嬢めいた口調で話すが、たまに地が出る。

三佐さんを色々な意味でライバル視している。

5冊目「三佐さん提案する」

人気MMORPG、エルダー・テイル。

その数多い魅力の中でも、最も華々しく、また、困難であるもの。

大規模戦闘^{レイド}。

通常6人の仲間^{パーティ}で行動するこのゲームの例外。

24人、ときには96人もプレイヤーが入り乱れる、戦闘でなくもはや戦争と言うべき冒険だ。

勝利すれば、多くの経験値と希少なアイテム、そして何より榮譽を手に入れることができる^{クエスト}試練。

しかし、そのリターンに対して、当然リスクも大きいのが、大規模戦闘である。

D。エルダー・テイル 日本サーバー最大の戦闘系ギルド D・D・

サーバーで最も大規模戦闘に力を入れていとされるとされるこのギルドで、今、勝利の栄光を掴み損ねた一団が帰還した。

「……これで4度目か……」

「……やっぱ、急造メンツじゃ無理なんじゃね？」

「大規模戦闘は廃人専用ってことか……」

「少なくとも、カンストしてから挑めってことかもな……」

「ってか、人多すぎ。敵多すぎ。わけわかないでやんすよ……」

木霊のように小さく寄せては返す弱音を振り払うように、「ことさ

ら明るい声が響く。

「……ほ、ほら。みなさん、落ち込むことはありませんわ！ 大規模戦闘なんて、試行錯誤してなんぼですよ。初めてでうまくいくだなんて、そんなのごく一部の廃人かバケモノプレイヤーくらいのものですもの。私だって初めてのエリアは戸惑うことばかりです」
「そうそう。コイツ、実はこう見えてテンパリ娘さんでさあ。もう突発でトラップとか喰らうと……」
「あ、アンタは黙ってなさい！ ……とにかく……」

声の主、金髪の妖術師、リーゼは、言葉少ない面々を見渡した。

自分と、副班長である 武士 を除く全員が、D・D・Dに入って日の浅いメンバーだ。

レベルも上限段階には程遠く、エルダー・テイルのプレイヤーとして、まだ中堅の領域に足を踏み入れたかそうでないか、といったところ。

新人育成担当であるリーゼは、このギルド初心者メンバーを引き連れて大規模戦闘クエスト「バグズポッドの結果」に挑んだ。

このクエストは大規模戦闘コンテンツの中でも難易度の低いものとして知られ、レイド初心者御用達のクエストである。

だが、難易度が低いとはいえ、レイドコンテンツでは、通常のパーティープレイと大きく異なる技術や経験を要求される。

結果として、リーゼ率いる部隊は、善戦むなく攻略に失敗した。その回数、4度。

いずれも、クエストの討伐対象にすら辿りついていない。

今日にいたっては強行軍で2度挑戦したが、いずれも中ボス程度のエネミーに敗北する状態であった。

もっともこれは、特に珍しいことではない。

大規模戦闘は水物で、幾度の失敗を経てようやく攻略方法を見出

すのが一般的だ。

加えて、このメンバーはまだ経験不足の上に連携不足。足並みが揃わず、能力を互いで封じあっているような状態である。確かに、徐々に動きは変わってきている。数度挑めば攻略も見えてくるだろう。

しかし。

そういった「プラスの面」よりも、敗北した、ろくにEXPが得られない、アイテムのドロップも目ぼしいものがないといった「マイナスの面」がわかりやすいが故に、メンバーのモチベーションは確実に低下していた。

そもそも、大規模戦闘は手間と時間がかかる。

1ゾーンの攻略に長ければ1時間単位の時間を要することもあり、24人の日程を調整するだけでも一苦勞だ。そして、そこに至るまでのアイテムの用意や、特技の検討といったことも必要である。

それだけの準備を行い、失敗が何度か続けば、それは士気が落ちるのもやむを得ない。

1度でも大規模戦闘の成功を体験すれば、リターンがコストに見合ったものであることを認識できるのだろうが、このメンバーの多くは大規模戦闘のクリアを未経験である。

(……思った以上に落ち込んでますわね)

(ここは下手に励ましても逆効果だな。いったん仕切り直すか)

一応、EXPやドロップアイテムがほとんど得られないからといって、全くプレイヤーたちに得るものがないわけではない。

ギルド公認で大規模戦闘に参加した場合、ドラゴンキラーポイントレイドアイテム獲得点と呼ばれるポイントがメンバーには加算される。

これは、大規模戦闘で獲得したアイテムを分配するときのオークションで使うことのできるポイントであり、溜めて、別の大規模戦闘に参加したときに使用することもできる。

しかし、大規模戦闘のアイテムと交換できるという性格上、アイテムを獲得できなかった負け戦に参加した場合には、作戦成功時と比べて得られるポイントは目減りする。

その話題を持ち出しても、彼らの落ち込みをカバーできないと判断して、リーゼは解散を宣言した。

本来ならば、次回に繋げる反省会を開くべきところであるが、やむを得ない状態だった。

「みなさん、少しずつ大規模戦闘の動きを身につけてらっしゃいますわ。攻略もそう遠い話ではありません。今日はお疲れでしょうし、次につなげる話は明日以降にしましょう」

ばらばらと戻ってくる返事は、いずれもが力ないものだった。

「……ということがあったのですわ。実際問題として、初心者向けの大規模戦闘訓練メンバーから、何人か脱落者が出ています。補欠の希望者はそれなりにいますから人数はカバーできますが、そのたびに連携の練度は下がりますし、問題ですわ」

D・D・Dのスタッフ会議の中で、リーゼはため息をついた。超巨大ギルドであるD・D・Dでは、全メンバーを集めた会議など開けない。

このため、定期的に中核スタッフによる会議を開き、その結果をギルドサイトに掲載することで、数多いメンバーの情報共有を図っているのである。

「モチベーションの低下か」

「むう。軟弱でゴザルな！ 数度の敗北で挫けるとは……これだからゆとり世代は！」

「いや、ゴザル。アンタも大概若手じゃない」

「拙者はゆとりの揺り戻しでゆとれなくなつた詰め込み系のさらルネットに下の世代でゴザル。この口調も古典ルネット回帰の現れ！」

「ゆとれねエって何語だよっ?!」

「……先輩、狐猿、ユタ、話を本題に」

「「イエスマム！」」

「ぐ。この真面目っ子めエ」

戦術立案担当スタッフの高山三佐みさが、脇道に逸れかけたメンバーを一言で制止する。

彼女は、よく言えば個性派、悪く言えばてんでばらばらのメンバーに手綱をかけられる数少ないスタッフである。

リーゼは個人的に彼女のことを好きではなかったが、今回ばかりはその対応に感謝した。

「ところで、りっちゃん、今までそういう話はなかったけど、何で今回そんなに苦労してるの？」

「以前もこの傾向はありましたわ。今回は連携に手間取り、失敗回数が増えているので、特に士気の低下が目立っているだけです。

「たまたまこれまで、目に留まらなかつただけだと解釈すべきですわ」「やっぱり、外部のレイドコミュニティでそうしているように、レイド初心者は上級者の中に混ぜてプレイするのがいいんじゃないのでしょうか？」

「それは無理だな。初心者の世話をしながら指揮ができるような人間は、D・D・Dにだって多くないんだ。総大将、姉御、高山女史、坊主がフォローに回ったりリーゼのお嬢をいれても、まあ10人前後つてとこだろう」

「な、なんで私だけ条件つきなのですか！」

「リーゼ。落ち着いて」

「ぐぐ……し、失礼しました、御主人様^{ミロート}」

「そういうところが条件つきなんだが……まあいい。平時だったらそれでも回せるだろうが、今は『新皇の帰還祭』と『武帝の遺産』の発見で人手不足だ。新人の世話に人をつける余裕はないだろ」

日本サーバー最大の戦闘系ギルドである D・D・D において人材不足が問題になるというのも妙な話であるが、これは大規模戦闘で指揮をとれる人間の希少性に起因する。

大規模戦闘は参加こそ「頭数がそろえば」可能であるが、実際に高難易度のクエストを攻略しようとなれば、大人数を統率し、効率よく運用する「指揮官^{リーダー}」が必要となる。

一般的な大規模戦闘では、参加者24人のうち、指揮をとることになるのは多くて4人程度。

つまり、上の例では1回の大規模戦闘に参加すると、指揮される「兵士」としての経験は20人が得られるのに対して、「指揮官」としての経験を積むことができるのは4人だけということになる。

そもそも、大規模戦闘に参加する手間や下準備を考えれば、「兵士」として参加した経験を持つプレイヤー自体が貴重^{アンコモン}な存在だ。まして、「指揮官」の経験者となれば、貴重^{アンコモン}を越えてサーバーの中においても希少なプレイヤーである。

故に、「指揮官」経験者は以後も「指揮官」として大規模戦闘に参加し続けることになり、結果的に雪だるま式に経験が増加して、熟練の「指揮官」はごく一部の人間に限られることになるというわけだ。

大規模戦闘においては参加者の日程調整が最大の苦勞を伴うとされているが、その中でも「指揮官」役の確保は最も重要なポイントだった。

「兵士」の頭数が揃っても「指揮官」が足りないせいで作戦が実

行できないことすらある。

「初心者を上級者に混ぜて出撃させるってことは、それだけ必要となる指揮官の確保日数が増加する。そんな余裕があるなら、新しい大規模戦闘クエストに指揮官を振り向きたい……ってわけね」

「その通りだよ、姉御。もたもたしてたら、また 黒剣 や 西風に幻想級おしいところをかつさらわれちまう。本当ならリーゼのお嬢にだって指揮役として最前線に出てもらいたいくらいなんだぜ？ なあ、総大将」

「だが、新規プレイヤーの増強は必須だ。それが D・D・D と他ギルドの違いでもある。リーゼはそちらに専念してもらおうよ」

「ってことは、現状では、新人に気配りのできるりっちゃんができるだけ多くの初心者を連れて訓練レイドに行くのが、一番効率がいいってわけか。難しいところね」

次々と意見が飛び出すのは、ボイスチャットにおける会議の強みである。

普段ならば「クラステイさまと×つけるなら、ソウジロウかミチタカか、いやアイザックもありですよ。順番つげせめはどうしましょうか」とか、「三佐さんに罵られ隊でもリアルにやられたらマジへこむでゴザルよね」とか「リーゼちゃんマジ可愛い机叩いて『ひっ？！』って言わせたいぜい」とか「MAJIDE変する5秒前！」とかくだらないバカ話で終始するギルドームでの会話だが、仮にも D・D・D は日本サーバー最大の戦闘系ギルドである。

必要とあらば、真剣な議論を戦わせることも当然あるのだ。

「初心者を中心とした部隊の挑戦が減らせない以上、作戦失敗の可能性を減らすための方策は打ちにくいと考えますわ。ならば、いざ失敗してしまった後にも、モチベーションを低減させないための仕組みを検討できるとよいのでしょうか……適切な対応が思いつかな

かったのです。何か知恵を拝借できないでしょうか」

「現在の枠組みでは、作戦に失敗するとレイドアイテム獲得点の入手量が減りますが、その点を修正します？」

「そいつあどうかな？ 作戦に失敗したってことは、ポイントで交換すべきレイドアイテムが獲得できないってことだろう。商品が増えないのに通貨だけが増えるのはうまくねえと思うぜ」

「それに、一律で配るんだったら、あまりモチベの改善には意味がなさそうでゴザル。そういう枠組み、ってだけで、ありがたみを感じにくいのではないでゴザるうか」

多くの意見が挙げられては反論されていく。

その中で、しばらく発言のなかった高山三佐が、ぽつりと言葉を漏らした。

「……つまり、作戦に失敗すると、ドロップアイテムや評判、EXPといった、適切な行動の強化子が少なくなる。そこをどう下支えする、ということですか」

「なんか、山ちゃんが難しいことを言い出したんだけど、どうしよう、そのゴザル」

「ふむ。オペラント条件付けか。スキナー箱のエサには何を据える？ 基本的に忠実にトークンかい？」

「しかもなんかギルマスには通じてるでゴザルよ！？」

「お見通しですか。お人が悪い。ならば、隊長が提案してくださればいいのに」

「いや、君の言葉で思い出しただけさ。プロフェッショナルの前ではおこがましいよ。任せる」

「……お、おおお二人だけで勝手に話を進めないでくださいませんこと！？」

頷き合う三佐とクラスティに、リーゼが上ずった声でツツコミを

入れる。

その爆発寸前の気配を察して、リーゼの隣に座っていた 武士が思わず立ち上がりかけた。

しかし、三佐はさして気にする素振りも見せず、淡々と言葉を返す。

「失礼。心理学に基づく学習技法に、トークン・エコノミーというものがあります。これは、行動心理学で言う自発的行動条件付けオペラントの応用なのですが、対象の適切な反応に対して報酬として代用貨幣トークンを与えることで、その適切な行動を自発的に取る頻度を高める技法です。代用貨幣トークンは消費することで、対象の嗜好する物品との交換や、行動制限解除といったメリットを受けることができるよう取り決めしておくことで、代用貨幣はその価値を担保されることになります。

いわゆる「馬の前にニンジンをぶら下げる」に近い方法ですが、「対象が直接的に欲しがっているもの」を報酬としないことがポイントですね。通常の強化子……ごほうびのことですが、それと比べて代用貨幣は飽きられにくく、かつ「それ自体を収集する」という動機が生まれやすいメリットがあります」

「……ごめん山ちゃん。3行でお願い」

「つまり、

奨励すべき行動には、わかりやすいごほうびがあるべきである、

ということです」

「理屈はよくわかるが、高山女史。実際問題として、どうそれを生かす？」

「たとえば……こんなのはどうでしょうか」

三佐のプレイヤーがチャットモードとあるページのアドレスを張り付けた。

拡張子からすると画像ファイルである。

リンクを開いた全員が、言葉を失った。

「……ご、これは……っ」

「なん……だと？」

「……山ちゃん……これ……」

「な……っ」

「皆さん、どうかしましたか？」

「いや、続けてもらえるかい？」

皆の反応に怪訝さを感じたのか、しばし沈黙した三佐に、クラス
テイが言葉を促す。

「これは、私が以前いた職場で使っていたものですが、こういった
「がんばりましたシール」を作り、優秀な行動をとったメンバーに
代理貨幣^{トークン}として配布するのです。作戦失敗時にもわかりやすい「ご
ほうび」としてモチベーションになりますし、それを作戦後の反省
会と絡めれば、皆が落ち込んで会が開けないということもなくなる
でしょう。また大規模戦闘特有の行動の取得も早くなることが期待
できます。配布条件は、平均レベルが一定以下大規模戦闘^{レイト}に挑み、
敗北した場合として。代理貨幣の用途は難しいところですが、大規
模戦闘の優先参加ポイントへの加算や、大規模戦闘でのドロップア
イテムオークションで利用できるというのはどうでしょう。次の大
規模戦闘参加への誘引にもなります」

三佐の説明を半ば聞き流して、全員が注目していたのは、彼女の
提示した画像データ。

そこには、エプロン姿の二頭身キャラが、「がんばりました」の
フリップを持つ姿が描かれたイラストがあった。

釣り目がちで、ショートカットの姿。

それは、どこからどう見ても、エルダー・テイル における「
高山三佐」のモデリングと酷似していた。

「……山ちゃん、質問」
「あ、先輩、申し訳ありません。わかりにくい説明だったでしょうか。一気に話してしまっ……」
「いや、その……そうじゃなくて……このイラスト、誰が描いたの？」
「私ですが」

沈黙。

それをどう勘違いしたのか、高山三佐はそそくさと暫定公開ファイルを消去した。

「失礼しました。確かに上手な絵ではありませんし、ギルドにはイラストの上手な方もいるでしょうから、その方にデザインを任せるとして。職場で描いたのも、子供たちにせがまれて仕方なくであった、決して絵に自信があったりするわけではないので念のため。ですが、視覚化して溜めておけるように、代理貨幣トクンは単なるポイントではなくこのような形がよいのではないかということで見せただけです。ええ。その点だけは誤解なきようお願いします」

（お、おい保存したか今の！）
（まさかの三佐でんてー直筆画！ 当然永久保存版でゴザルよ！）
（……ムキー！ 今のムーブは絶対にワザとですわ！ このごびこび系泥棒猫ー！）
（いや、これが計算だったらどんな役者だよ！）

自分の回りで繰り広げられるプライベートルなにしよばなし会話に気付かず、三佐は心なしが早口で弁解をする。
そこに。

「いい案だな。日程調整担当、アイテム管理班はシールの利用方法について検討を。シールの配布要件は、三羽鳥で検討しておいてほしい。あと、高山三佐には、提案者として、イラスト案の作成を頼もう。まあ、仕事に差し支えるといけないからね。今見せてくれたものの服装を、エルダー・テイル 風にアレンジしてくればそれでいい」

何食わぬ口調で、クラスティは提案されたアイデアを肯定した。だが、高山三佐以外の全員は気づいている。

この男、絶対にこの展開を面白がっている、と。

「……そ、そうですか？ その程度ならば、さほど時間もかかりませんが……私などの絵で構わないのでしょうか。もっと美麗な絵の方が動機づけとしての誘因も強いかと。というか、私のイラストのままでもよろしいのでしょうか？ 私は新人育成担当ではないのですが」

「も、問題ないと思うぜい！」

「そつでゴザル！ むしろイイ！」

「……ぐぐぐ」

「お嬢、おすわり。クラスティさんがGOサイン出したんだぜ？」

「ぎぎぎぎぎぎ」

「くくつ、りつちゃん南無」

「お姉様まで笑わないでくださいーい！？」

……かくて、高山三佐さん提案の「がんばりましたシール」は後々検討期間を経て制度化され、D・D・D でひと波乱を巻き起こすことになるのだが、それはまた、別の話である。

「お、原稿完成おつかれさま……って、山ちゃん？　なんで私まで描いてあるの！？　しかもこの縦ロール、りっちゃん？」

「わ、わたくしもですよ！？」

「配布基準を決めたのは私たち三人ですから、連帯責任です。質問、反論は許可しません。これは決定事項です」

「そこで自分のちよつといい台詞をネタにするか山ちゃん？！　…と。どうしたの、りっちゃん。急に黙りこくって」

「べ、別に！　なんでもありませんわつ。イラストを描いてもらっただからってぜんぜん嬉しくなんてないんですからねっ！」

「ふーん、へー、ほー」

「な、何ですかお姉様そのリアクションは！」

「喜んでもらえなければ幸いですよ」

「う、嬉しくなんてないっていつてるのですわムキー！」

(三羽鳥揃い踏みMAJIDE!?)

(こ……これは、隠れファンクラブの皆に知らせなければでゴザルよーっ)

(ああ、うちの御大将のしたり顔が見えるようだぜ……)

5冊目「三佐さん提案する」(後書き)

キャラクター紹介

狐猿(暗殺者LV90)

数多い D・D・D のスタッフメンバーの一人。

通称「ゴザル」。某ニンジャ漫画にあこがれてゴザル口調ロールを徹底している変人。

気は優しくて優秀なプレイヤーであるが、語尾がすべてを台無しにしている残念くん。

D・D・D 三羽烏隠れファンクラブ所属。

基本ミィハー！。

6冊目「クラスティさん異言を発する」(前編)

大規模オンラインRPG、エルダー・テイル。

この、剣と魔法の本格ファンタジーゲームにおいて、日本サーバー最大の規模を誇る集団が、D・D・Dである。

今日も、そのメンバーを束ねるスタッフメンバーたちが、今後の運営と活動の方針を確認すべく、ミーティングを行っていた。

「そいじゃ、次の大規模戦闘は『武帝の帰還』の最新クエストに挑むってことで日程を調整しようか。リーゼのお嬢とユタの坊主は、新人メンバーの中から、実働部隊に昇格する者を選抜しておいてくれ」

「承知しましたわ」

「あいよ」

「高山女史は、戦闘哨戒班の日程調整を頼む。実働部隊の日程調整とメンバー選抜は俺と大将に任せてもらおう。サイトの方はいつも通り、ゴザルに任せるぜ」

「わかりました」

「了解でゴザル！」

「では、今日の会議はここまでとしよう」

「おつかれさまでゴザル！」

「祭りの前の静けさ……ハジマリのオワリ……右腕が、哭く……」
「平常運転中二乙」

ギルドマスターの狂戦士、クラスティが宣言すると、集っていたメンバーたちが三々五々に散っていく。

これから、個人としてクエストに挑む者、迫る大規模な作戦に備

えて装備や道具を充実させる者、スタッフとしての作業に臨む者……。
だが、少なくない人数が会議後もギルドルームにとどまったまま、
というのがいつもの光景だった。
話し合いで詰めきらなかったところを有志で調整する、なんてい
うマジメな理由ではない。
ミーティングの後にはぐだぐだと益体もない話で時間を潰すのが、
一部のスタッフたちの楽しみなのである。

「しっかし、三羽鳥シールは大当たりだったな。あれでだいぶレイ
ドで使えるメンバーが増えたんじゃないか？」

「目に見える形で自分の行動が認められれば、やる気は出るもので
す」

「それだけじゃあない気がするのでゴザルが……まあ、結果オーラ
イでゴザルよ」

「でもさ、別に採点者は私たちだけじゃなくてもいい気がするんだ
けど。具体的にはそのメガネの人とか、マスターのお仕事として
やっていいと思う」

「僕のシールと、三人のシールでは価値が違うからね。客観的な価
値ではなく、情動的な価値において、だよ。労力対顧客満足度を考
えれば、今の体制が最適解だと思わないかい？」

「わ、私は、御主人様ミコウのよくできましたシールなら集めまくりませ
わ……」

「ボケならはつきり口にしろよ。ぼそぼそ言われたら隣で聞いている
こっちが恥ずかしいわ！」

「だ、誰がボケですかーっ！」

「夫婦喧嘩乙」

「誰がコイツなんかとーっ！」

ボイスチャットによる雑談は、ほとんど顔を突き合わせたそれと

同じ軽妙さで言葉が飛び交う。

言葉のキャッチボールというよりは弾幕が飛び交う戦場^{バトル}に、異質な電子音が響き渡った。

ゲームの効果音ではない。プレイヤーのマイクが、外部からの声を拾ったものだ。

その音源は、ギルドマスター、クラスティ。

「……と、職場から電話のようだ。少し席を外すよ」

いまだ着信メロディですらない無機質な音楽が、クラスティのプレイヤーの電話の呼び出し音であつたらしい。

思わず他のプレイヤーたちは手元の時計を確認する。

今日は土曜日。日付が変わって一時間が過ぎている。

「マスターさん、この時間にお仕事の電話ですかー。大変ですねー」

「ああ、最近は少ない方だぞ？ 数年前はもっと頻繁だった。一度なんか、大規模戦闘中に緊急の電話とかで、電話しながらテキストチャットでプレイしてたこともあつたっけな」

「どんなブラック企業に勤めてんだよっ!？」

「ユタ、この程度でブラックとか言っちゃダメだよ。世の中、下には下があるんだからさ。はあ」

「先輩、お疲れ様です……」

「やべ。俺、地雷踏みました?」

「このバカっ。暇人学生の癖に、社会人のお姉さまを疲れさせてどうするのよ!」

「し、知らねえよ! っていうかテメエが言うか!? 社会人の機微理解しろとか、色々無理だつて!」

「まあ、隊長^{ミロード}の場合には、勤めているというか、率いているというか……」

「若き経営者MAJIDE!?!」

「さ、さすが御主人様^{ミロト}」

「いえ、話を漏れ聞いた限りでの私の推測ですが」

「あの人ならさもありなんで……あれ？ マスター、テキストチャットモードになったでゴザルよ？」

エルダー・テイル では意思疎通に、マイクによる音声入力を利用したりアルタイムのボイスチャットシステムを用いるのが主流である。

しかし、設備や様々な事情によりボイスチャットが困難なケースもあるため、キーボード入力によるテキストチャット機能にも対応している。

ゲーム内のキャラクターになりきり演技する遊び方にこだわる、ロールプレイヤーと呼ばれるタイプのプレイヤーの中には、自分の声でキャラクターイメージを損ないたくないという理由でテキストチャットにこだわる者もいる。メジャーではないが、需要はある機能なのである。

だが。

『798i・l4rw3bv』

テキストチャットの発言画面に現れたのは、謎の文字。

「……え？」

「ちょ、どうしたでゴザルか!？」

「禁断の呪文……その意味を解読したとき、D・D・D 創設の秘密が明かされる……」

「ねえよっ! どう見てもなんか間違っつてキーボード押しちゃいました的な何かだろうがっ!」

『9/1,6yhrb』

「ま、また！ ど、どうしたでゴザル？ まさかとは思つが……寝ねむり落ちでゴザルか？」

「はは、大将と数年つるんでるが、こいつは珍しいな。可愛いところあんじゃねえか」

「だ、大丈夫でしょうか、御主人様ミロート。何か毛布でもかけて差し上げられればいいんですけど」

「……寝落ちで突っ伏したにしては、連続で押されたキーボードの範囲が狭くないでしょうか。これは、もっと小さな、そう、指2〜3本分の、子供の手のひらくらいの……」

騒然となるギルドルーム。

全員が、クラスティの次の発言に注意を向けた、その瞬間。

テキストチャットモードが、解除され。

「……ん、こら、まったく、相変わらず上で遊ぶのが好きだな、君は」

困惑する全員の耳に次に飛び込んできたのは、穏やかなテノール。聞きなれたギルドマスター、クラスティの声だった。

「ご、御主人様ミロート！？ う、上？」

「暴れないで。うまく……支えられないじゃないか……んっ、爪を立てないでもらえるかな？」

「ちよっ……これはアレ？ 激しく前後する流れでゴザル!？」
「公開放送MAJIDE!？」

いつも冷静沈着な彼に似つかわしくない、どこかくすぐったそうな、甘やかさを思わせる口調。

「え？ え！？ あ、あわわわわ、その、な、なんですのこれはー
っ！？」
「お、落ち着けお嬢っ！ これはアレだろっ。よく漫画とかであり
がちな、アレっぽい会話って思わせておいて実はナニっていろいろだ
！」
「で、でも……テキストチャットモードにしてたよ！？ それって、
声聞かれたくないってことじゃない？ だったらやっぱりっ？！」
「お嬢、口調口調！ 素に戻ってる！」

涙声のリーゼが声を詰まらせた、その瞬間。

「にゃー」

そんな声が、クラスティのアバターから、発された。

「……へ？」

「マスターさんが、にゃーと仰ったでゴザル？」

「にゃあ？」

「ネコ耳クラスティ？」

「だからねえよっ！ 想像しちまっちじゃねえか！」

「……え……その、あれ？ ということは？ え、ええええええ
！？」

「しかし、どこからどう聞いても今のは……」

「よっと……失礼しました。少し、飼い猫が暴れましてね」

「にゃー」

その台詞が隠語としての「猫」ではなく、言葉通りの意味である
ことを証明するように、クラスティの声に、猫の泣き声が重なった。
どうやら、マイクの前にはプレイヤーと、そのペットが陣取って
いるらしい。

「寒い時期ですからね。放熱する端末に惹かれたのでしょうか」

「……………」

「……………」

「……………」

「ところで、随分賑やかだったようですが。どうかしましたか？」

「な……………っ、べべべ、別に何でもありませんっ！ 変なことか連想したりなんて、決して！ 断じて！ はしたないことなど、考えていないのですわーっ！」

（ぐああああ、この男、絶対悪人だーっ！）

（流れるようなこのムーブ。セクハラだとツツコミを入れるには証拠不足……………さすがレベル高いでゴザルね！？）

（……………リチヨウさん。これは隊長の悪ふざけ？ それとも無意識？）

（大将はこの手の冗談はしないからなあ。今回は天然じゃないか？）

（天然だろうと意図だろうと恥らうりーぜさんイイ！ 全オレロケ班が灰色の脳細胞に光速撮影！）

季節は冬にさしかかり、世間は寒くなるばかり。

それでも、D・D・Dは、平常どおり無駄に放熱運転なのであった。

6冊目「クラスティさん異言を発する」(前編)(後書き)

キャラクター紹介

ユタ(武士LV90)

数多い D・D・D のスタッフメンバーの一人。

通称「ツツコミ」。リーゼさんの補佐としてギルドに入ったばかりのメンバーに大規模戦闘の基本を叩き込む「新人育成」を担当している。

口は悪いが根は真面目な性格で、ボケには反射的にツツコミを入れてしまう律儀な青年。

そのキャラクターが災いして、貧乏くじを引くこともしばしば。

7冊目「クラスティさん異言を発する」(後編)

大規模オンラインRPG、エルダー・テイル。
このゲームにおける、日本サーバー最大の規模を誇る集団^{ギルド}、D・D・D。

今日今日とて、そのメンバーを束ねるスタッフメンバーたちが、今後の運営と活動の方針を確認すべく、ミーティングを行っていた。

「では、今日の会議はここまでにしよう」

「おつかれさまでゴザル！」

「さあ終幕を……始めよう」

「平常運転中二乙」

ギルドマスターの 狂戦士 クラスティが宣言すると、集っていたメンバーたちが散っていく。

残るのは、ぐだぐだした雑談が目的の、いつものメンツたち。

「お、ダルタスの坊主、ようやく新人組卒業かあ」

「まだ視界は狭いですが、責任感と真面目さは評価に値すると思いますわ。一回一回、注意を受けた点についてきちんと修正する真摯さもあります」

「連携についても、悪くありませんよ。彼の経験からすれば十分と言えるでしょう」

「……ダル……そんな子いたっけ？」

カウンターストップ

「先輩の参加された回にはいませんでしたから。まだ成長上限ではないですから、これまでも一緒に動く機会はなかったかもしれませんがね」

「ほー」

(ぐぐ、ダル太のヤツ、三羽鳥にここまで褒められて！ 悔しい！
これはセカンドキャラを作って新人班に突貫するしかないでゴザ
ル……っ)

(……ぶれないよなあ、ゴザルは)

(これは拙者一人の意見ではゴザらん！ D・D・D 全ン百人
の三羽鳥ファンクラブ全員の気持ちでゴザルよーっ！)

と、ギルドルームに響きわたる、ゲーム内には存在しない電子音。
クラスティのプレイヤーの電話の着信音だ。

「……と、職場から電話のようだ。少し席を外すよ」

「また夜中のお電話ですかー。というか、この流れ、最近もあつた
気がしますねー」

「まあ、オフのことはあんまりつつこむもんじゃないでゴザル……
あれ？ マスター、チャットモードになつたでゴザルよ？」

「この流れも最近あつた気がするが……」

エルダー・テイル における意志疎通手段の一つ、テキストチ
ヤット。

マイクをオフにして、文字によるコミュニケーションをとるモー
ドである。

先日、クラスティの端末の周りで彼のペットの猫が暴れまわつた
ことで、一騒動があつたばかり。

ギルドメンバーが、またか、と身構えた、その瞬間。

『これで、問題なく入力できていますか？』

画面に表示されたのは、まったくもって普通の文章であつた。

「……あ、普通にしゃべった」
『マイクの調子が悪くなりましてね。明日には妹に実家から持ってこさせますが、今晚中はチャットを使うことになりそうです』

さらりと打ち込まれた台詞に反応し、一部のギルドメンバーの間に動揺が走る。

「……皆さん。確かに隊長が十全に動けないのは不便ですが、今回は特に大規模な作戦ありませんし、そこまで動揺する事態ではないと思います」

「いや、高山女史。多分、ヤツらのポイントはそこじゃねえだろ……」

事態を收拾しようと声をかけたギルドの副官、高山三佐に、古参の格闘家、リチヨウがため息交じりの言葉を返した。

そう。数々の修羅場を経験してきた D・D・D のスタッフメンバーが、日常のこんなトラブルで右往左往するはずがない。

つまり、彼らが動揺している理由とは……

「妹MAJIDE!？」

「イモウトでゴザルとーっ?!」

「全俺脳内会議即時議決！ 妹充有罪！」
ギルテイ

「テメエら、食いつくのそこかよっ！」

「い、妹さんですの!？ ど、どんな方なのですか？」

「って、お嬢までそこがポイントなのかつ!？」

冷静にして沈着、礼儀正しく判断は的確。

おまけにその声だけでもファンを作るほどの美声と、「完璧超人」の呼び声高いクラスティである。

その妹ともなれば、多くの者が興味を示すのも、無理からぬこと

であった。

周囲の反応をひとしきり確かめた後で、クラスティはその混乱を收拾すべく……

『ええ、私が言うのも何ですが、才色兼備と言って差し支えないでしょう。品行方正で細やかな情も持ち合わせている。正直な話、妹にしておくのがもったいないくらいですよ』

「ぎ、ギルマス、なにガソリン注いでるんっすか!？」

……打ち込まれたのは、全く逆効果の台詞だった。

「むがーっ! 荒ぶれ十二人の怒れる俺! 何だその脳内妹具現化系!」

「く……マスターのイケメンムーブを見る限り相当レベル高い娘さんでゴザルな……」

「というか何ですかそのシスコン全開発言。今までのクールな陰険鬼畜眼鏡の色男イメーシ守ろうとかそういう気持ちはないのかなクラスティ君」

「い、妹にしておくのがもったいない……ふ、不潔ですわ御主人様っ! そ、そういうのは、非生産的ですっ。人倫にもとります! は、はしたないですわっ!」

「今のセリフから間髪いれずにその発想が出てくるお前の方も相当はしたないと思うけどな」

「うつさい思春期! か、勝手に人の思考過程を妄想しているんじゃないですわ!」

「脳内オーブンリーチで逆切れすなー!」

蜂の巣をつついたように、という使い古された表現がぴったりなカオス。

完璧超人クラスティシスコン説に、一瞬にして D・D・D の

ギルドルームは灼熱の鉄火場と化した。

「……どしたのユズコちゃん。腕ぐるぐる回す表現動作エモーションなんてやって」

「ふーふふー。古式ゆかしいぶーめらんのポーズです。深い意味はありませんよー？ リーゼさんとユタさん、仲良しですよねー」

「どっちもどっちと。いい性格してるねえ、ユズコちゃん」

その中で、2人。このやりとりの違和感に、首を傾げているメンバーがいた。

「……おかしい」

「やっぱ、高山女史もそう思うか？」

クラスティの副官を自認する高山三佐と、ギルドの最古参メンバーであるリチヨウである。

「隊長は、誰かを盾にして周囲を沸かせることはよくやりますが、自分が矢面に立つことはない。むしろ、そうならないようにすることについては天才的な人のはずです」

「だな。大将のリアル敵愾心ヘイト管理能力は神がかってるからなあ」

「平時は 守護騎士 らしからぬ意味で、ですがね」

「これは、もしかして」

「ええ。おそらくは……」

万能選手にして完璧超人。

そんな性能にかかわらず、クラスティが多く敵を作らないのは、類稀なるバランス感覚による。

注意や興味、意識を周囲の人間へと均等に割り振り、その影に隠れて能力を発揮することで、嫉妬や狂信を避ける技術。

おそらくはクラスティのプレイヤーがゲームの外で培ってきた、己に向けられる感情を管理する能力だ。

天性のものではないだろう。おそらくは、彼が人生経験の中で必要に迫られて習得せざるを得なかった後天的なスキル。

D・D・D の中においても、彼との付き合いが深く長い2人のような立場でなければ気付いていない、クラスティをクラスティたらしめている隠れた力だった。

しかし、その感情管理能力が今は、全く機能していない。

2人が感じた違和は、そうした部分についてである。

「妹充死すべし！ イヤーッ！」

「可愛い妹なんてウソさでゴザル！ 可愛い妹なんてないさでゴザル！ 寝ぼけた人が見間違えたのさでゴザル！」

「だけどちよつと俺だつてほしいーっ」

「実際オバケ級レアMAJIDE!？」

「懐かしいネタだなオイ！ っていうか生まれてねえだろそれ放送してた頃！」

「妹となんて……ああ、御主人様ミロードが人の道に外れた過ちを……」

「シスコン即外道つて明らかに思考が二階級特進してるだろお嬢っ！」

もう、なにがなんだかわからない言葉の嵐の中で、

「ふむ。品行方正で細やかな情を持ち合わせている妹君は、勝手に兄の部屋に入り込んで、人の発言を捏造しようとするわけですか。品行方正という言葉の意味を辞書にいくつか追加しなければいけないようですね」

よく響くテノールの「声」がギルドルームを満たした。

静まり返る一同

無理もない。その声は、まぎれもなく、クラスティのもの。
マイクが壊れてボイスチャットができないはずの、ギルドマスタ
ーの声だったからだ。

「……あ、あれ？ お、お兄ちゃん、職場からの呼び出しがあつた
んじゃないの？」

沈黙を破ったのは、少女の一言。その声もまた、クラスティのア
バターから発せられている。

どうやら、ギルドマスターの青年がゲームを起動している端末の
前には、別の少女がいるらしい。

「呼び出しの理由が明快でなかったので、彼を問いただしました。
全部話してくれましたよ」

「……げ」

青年の淡々とした回答に、少女の声のトーンが盛大に低下する。

「部屋に勝手に入り込んで家捜しを始めたのは許しましょう。僕に
嘘をついたところで、それだって悪意があるものでなし、まあ、許
容範囲内です」

「おおつ。ありがとうお兄ちゃん大好き愛してる！」

「ですが、しょうもない理由で家の外の人間に余計な負担をかけた
ことについては、申し開きのしようがありませんよ？」

「……んげ」

「というわけで、僕は少し妹と家族同士の語らいをする必要性が出
てきましたので、今日はここまでで」

「きゃー?! 助けてねこしーるどー！」

「にゃー」

賑やかな声を残し、クラスティは接続終了。アバターはギルドホールから消え去った。

「……なんだっただ、今の」

「つまり、アレでゴザルか！ マスターには、お兄ちゃん好き過ぎて部屋に忍び込んでシスコン発言ねつ造しようとするようなお兄ちゃん好き好き愛してる的な妹がいると！ そういうアレ気なゲームな設定が生えてるってことでゴザルか！」

「ミダスの黄金……驕れるものには死あるべし。この因果、いかなる応報に繋がるか……」

「全俺殲滅部隊、TNT用意！ ぬこ充妹充爆発すべし！」

「おまえら本当にクラスティさん大好きだな！」

「当然ですわ！」

「お嬢にや言つてねエよ！ つてか、本人いないと堂々と言えるのな。ツンデレか！」

「……OK、クラスティ妹イラスト描いた」

「早いなオイ！？ 三佐さんのとき級じゃねえか！？」

「ちょ……ユタ、それえノン！？」

「私が、どうかしましたか？」

「あー、いや、その……」

「とりあえず、クラスティさんが帰ってきたら、妹さんについての事情聴取開始ですわー」

「そ、それでゴザルね！ 実際追及重点でゴザル！」

クラスティさん、妹持ち発覚。

この事実はいメージ画像とともに瞬く間に D・D・D 中に広がり、にわかにクラスティ妹ブームが巻き起こるのだが、それはまた別の物語である。

7冊目「クラスティさん異言を発する」(後編)(後書き)

キャラクター紹介

リチヨウ(格闘家LV90)

数多い D・D・D のスタッフの中でも、最古参のメンバー。

猫人族 だが、金と黒が混じった髪のカラーリングと長身のせいで、ネコというより虎めいた印象を与える。

長いプレイ歴に裏打ちされた経験と気さくな性格で、周りから「旦那」と慕われるベテラン。

プレイ歴からすれば後輩にあたるクラスティを「大将」と呼び、影から支える気配りの人。

8冊目「らいとすたっふさんたち爆発する」(前編)

12月24日。

世間はクリスマス一色。

外に出ればクリスマスソングとイルミネーション、幸せそうな親子連れやカップルばかり。

ほっち独り者は冬の寒さと、わが身の切なさを思い知らされる戦場で、センサ・ベルドゥーノセンサ・ヒエタ許容もなく慈悲もなくとばかりに身を切り刻まれる。

まさに戦場のメリークリスマス。

「クリスマスなんてないさー！ クリスマスなんてうそさー！ 寝ぼけた野郎が見間違えたのさー！ …… 全俺会議臨時決議！ リア充爆発すべし！」

「ふはははは、拙者も今年のクリスマスはリア充でゴザル！ リアルゴールド充でゴザルが！」

「この試練を超えれば、悪魔の使徒たちが逆位置の三角錐に集う、三日間の儀式。この半年分の靈気を右手の「憤怒の魔炎」ラスフレイムに充填できる……っ」

「……世間様が冷たすぎてMAJIDEもでないぜ」

そんな中、今日も今日とて エルダー・テイル にログインしている、日本サーバー最大の戦闘系ギルド、D・D・D の男性陣。英国紳士然とした三つ揃えのスーツ（のように見えるクロースアーマー）を身にまとう長身の青年 格闘家、セバス・チャン。通称「俺会議」。

黒装束に額当て、腰には小太刀と典型的なニンジャスタイルに身を包む少年 暗殺者、狐猿。通称「ゴザル」。

運営側も心得たもので、この日のプレゼント用に特殊な素材をドロップするエネミーや、限定販売商品などを用意したキャンペーンを展開している。

現実世界においても、ゲーム世界においても、この日は限りなく独り身には優しくないのであった。

しかし、悲しいかなゲーマー気質。彼らが戦闘しているのは「期間限定素材」をドロップするエネミーが現れる狩場であり、どう見ても彼らも、このクリスマスキャンペーンに乗せられているのだった。

「女性陣は！？ 三羽鳥はどうしたーっ！」

巨人の脛に拳を叩き込みながらの俺会議の嘆きに、ため息交じりで刀を振るいながら、ゴザルが答えを返す。

「三佐さんは職場のクリスマス会の前日準備。リーゼさんもクリスマスパーティーと聞いてるでゴザル。姐御は……」

「世界の理の変転に巻き込まれた。結界の修復にいそしんでいる」

「ああー、システムの仕様が変わってそのフォローってわけか。技術職ってのは大変だなあ」

「超訳チューニの言葉MAJIDE!？」

二刀流のグルカナイフを一閃させる少女のアバターから放たれるのは、MAJIDEの野太い声。

世界にはギャップ萌え、という単語が存在するようであるが、そんな単語がハルバードを担いで襲ってきそうな名状しがたき冒瀆的な破壊力を誇るシチュエーションである。

「ふははは、脳内会議開催のコツは、自分の中に他人を飼う、つまり人の気持ちになって考えることだぜMAJIDE。この共感力が

あれば人間たいていの事態はなんとかなる！ あと、脳内彼女とかも脳内再生できるし脳内クリスマスマスターとかでこの世間の荒波を超えることもできる！」

だが、このメンツにおいてそんなMAJIDEの言動は日常茶飯事であり、俺会議はさらりとそれを上回るダメ台詞で返す。

見かけはナイスミドルの英国紳士であるが、俺会議の言動はどう見ても変態という名の紳士の類であった。

「ここまで共感の大事さをダメさ全開で主張できる男を拙者は他に知らないでゴザルよ」

「はっはっはっ、褒めるな照れるじゃないか」

「愚者の黄金。無知の幸福だな。……ギルドマスターはどうした？」

「会社絡みではまずせないパーティで、面倒だって愚痴ってたでゴザル。妹連れて行って弾除けデコイにするとか何とか」

ギルドマスターであるクラスティが、若くして何らかの会社組織の経営者的な立場にいることは、スタッフメンバーにとって半ば公然の秘密である。

声質から20代くらいと推定される彼であるが、クラスティの組織管理手腕を見れば、事実であってもおかしくないだろうというのが、大方の意見だ。

「あー……。金持ち、頭いい、声もいいで、会社経営者たる。勘違いした肉食系（笑）女子とかほいほい突貫してくるよなあ。これで美形とかだったらマジ数え役満だろ」

「……リア充も極まると一回転してむしろ哀れでゴザルな」

「これが青い血故の責務というヤツか。了解した。地獄に落ちろギルドマスター」

「赤い人MAJIDE!？」

「で、リチヨウの旦那はどうしたよヤマザキ」
「……そ、それは世俗の名だ！ この世界では ライスフレイム 憤怒の魔炎 か、
クーゲルかもしくは厨二と呼べ！」

黒いローブを翻し、紫色の炎のエフェクトを放ちながら、厨二が
叫ぶ。

彼の得意技 デモンズ・ペイン 。現在のHPが低いほどダメー
ジ補正が跳ね上がる、 妖術師 の特殊な攻撃特技である。移動系
の魔法を駆使して敵の攻撃を回避しながら、残りHPを故意に下げ
てこの特技を連発するのが、彼のピーキーなバトルスタイルだった。

「……厨二はいいのでゴザルね」

「おっとすまねえザキヤマ」

「ふおおおおーっ！ ライスフレイム 憤怒の魔炎 っていつてるでしょうがー
っ！」

「……ヤマザキ？」

「いや、コイツ、間違えてこの前のオフで本名の名刺出してヤマザ
キって……」

「クウウウウウウゲル！ シュライバアアアアアアアアアアですから
あああああー！！」

「あ、ちなみにリチヨウの旦那は彼女さんとお出かけだそうでゴザ
ル」

「ぐあーっ！ あの物腰はモテルもの故の余裕か！ あのタイガー
マスクめ！ 虎の人め！」

「SYAGYAAAAA AAAAAA AAAAAA!!」

「スルーMAJIDE!？」

エネミーを蹂躪しながら、とめどなく話題が脱線し混沌状態とな
っていく。

故意の茶化し役である俺会議、冷静ではあるがどこか感性がズレ

「……まあ、ユタは勘弁してやってくれでゴザルよ。アレは基本的に女がダメなのでゴザル。少しはクラスのパーティでもなんでもして耐性をつけないとアレというか、リア充どころかリアル魔法使いにクラスチェンジしかねないでゴザルよ」

意外な言葉に全員の嫉妬モードが解除される。

ユタと言えば、どんな相手にも物怖じせずにツッコミを入れる、遠慮とか人見知りとかそんな単語とは対極に位置する青年である。

そもそもが、ギルドのアイドルの1人である女性プレイヤー、リーゼとバディを組んで周囲から羨望と嫉妬の視線を向けられているラッキーポジションだ。

どう考えても、女嫌いななんて繊細な感性を持ち合わせているようなキャラクターとは思えない。

「リーゼさん……ってーか、三羽鳥には普通に話してるじゃねえか」「あの3人は良くも悪くも女の子オーラが低いというか、漢女心おとめこころあふれる女性陣だからいいでゴザルが、普通の女性プレイヤー相手だとアレは目に見えて「敬して遠ざけ」めいたモードになるのでゴザルよ。実際将来とか心配でゴザルな」

そんなゴザルの様子に、納得したようにMAJIDEが手をぼんと叩く。

「……ゴザルとユタは、アキバク出身」

呟かれる言葉。彼が「MAJIDE」以外の発言を行うことは、ひどく稀だった。

だからこそ、その意味を他のメンバーは理解する。

アキバクこと、アキバ幕府。

数年前に 剣豪將軍 ヨシテルというコアなプレイヤーの元で急成長を遂げた、中規模戦闘系ギルドの名であった。

アキバ幕府 自体はさして大きなギルドではなかったが、当時は大規模戦闘での活躍を始めた新進気鋭であり、また中規模ギルドとしても特に後進育成がきめ細やかであったことから、多くの戦闘系ギルドが動向に注目をしていた。

時間さえかければ、アキバ5つ目の大規模戦闘系ギルドになる可能性もある。

そんな噂がまことしやかに囁かれるほどに、当時の アキバ幕府は勢いのあるギルドだった。

しかし、間もなくそのギルドは、華々しい戦績を上げることなく唐突に解散する。

解散の原因は、性質の悪い「ワガママキャラクター 姫ちゃんプレイヤー」によって引き起こされた対人関係の軋轢。

シンプルに言えば、ギルドマスター以外の幹部が色仕掛けハニートラップに落とされて潰れてしまったのである。

「……普段は表に出さないでゴザルけどね。ギルドが姫ちゃん系女性プレイヤーにぐっちゃんぐっちゃんにされて解散しちゃったせいで、アイツの若い心には女の人へのトラウマが刻まれちゃったでゴザルよ。ああみえて結構繊細なのでゴザル、アレは」

「あー……」

「……ゴザル。君は、大丈夫なのか？ 心に刻まれた古痕は、寒さに疼くことはないのか？」

「はっはっはっ。姫ちゃんプレイヤーだけが女でなし、拙者はユタほど純粹ではないでゴザルよ。ってーか、おにゃのこ萌えを語る余裕がなくなったら、拙者、お終いでゴザルし！」

「しかし、そうかあ。まさか、ゴザルやユタがあ の 西風 のギルマスと兄弟弟子にあたると思わなかったなあ」

俺会議の言葉に、ゴザルのアバターがぴたりと静止する。

「……なんで……ゴザルと？」

「あれ、知らないのか？ 剣豪將軍のセカンドキャラって、昔、西風のギルドマスターの相棒……っていうか、師匠役をやってたらしいぞ。なんでも D・D・D が 天塔 を攻略したときにヘルプで呼んだこともあるらしいぜ」

継続するゴザルの一時停止状態。

西風の旅団 といえば、アキバ5つめの巨大戦闘系ギルド。

本来ならば、アキバ幕府 が立つかもしれないなかったポジションに居座るギルドである。

否、そこまでならばまだいい。

「……それで、そのセカンドキャラは、西風 にいるんでゴザルか？」

「いんや、なんだか一時期 ティンダロス ってギルドで一緒に冒険したあとは、フリーになったとかなんとか。だからそのセカンドキャラ……名前は忘れちゃったけど、そいつは 西風 のソウジロウとは違って 放蕩者の茶会 には参加してなかったみたいだぜ」

さらに継続するゴザルの一時停止状態。

西風の旅団 といえば、アキバ最大のハーレムギルド。

男性7、女性3とも言われるプレイヤー比率のこのゲームにおいて、9割が女性プレイヤー、かつ、そのほぼ全員がギルドマスターであるソウジロウのファンであるという、恋愛シミュレーションゲームにしてもやりすぎな非現実的集団。

「ふふ……ふふふふふ……」

ゴザルにとって アキバ幕府 の 剣豪將軍 は、ゲームのいろはを叩き込んでくれた、尊敬すべき兄貴分的存在である。

なぜ、女にひどい目にあって居場所を失ったあの人に師事を受けた弟弟子が開いたのが、よりもよって女だらけのハーレムギルドなのか。

どうせギルドを作るなら、あの人の居場所にならなかつたのか。ふつつつとした怒りが、ゴザル少年の胸を満たしていく。

「むぐおおおおお！ ソウジロウ滅！ リア充死すべしでゴザル！」「ど、どうしたゴザル！？ そういうのは俺の台詞だろっ！ いつもの萌え以外には小憎たらしいまでに飄々としたキャラクターはどうしたー?!」

「西風の旅団 はたつた今から拙者の宿敵認定でゴザル！ ハーレム滅！ ソウジロウ滅！」

叫び声がフィールドに響く。

その瞬間。

同一フィールドの逆端を移動していたプレイヤーキャラクターの一団が、こちらを振り向いた。

「……え？」

「……最悪の邂逅……っ」

「……MAJIDE？」

女性ばかりの6人パーティ。

否。その中心にいるのは、ポニーテールめいて髪を鬨よろしく束ねた、中性的な顔立ちの少年。

今まさに話題となっていた、西風の旅団 のギルドマスター、ソウジロウ御一行であった。

「い、いやいやゴメンナサイなんでもないです失礼しました 西風のみなさん空耳ですよ空耳！」

「むごー！ 千載一遇！ ハーレム死すべし！」

「……厨二、足止め」

「心得た、アラクニッド・ネスト ！！」

今にも跳びかからんばかりのゴザルの足を、一瞬早く厨二の無差別移動障害魔法が縫いとめる。

俺会議の弁解が効果があったのか、西風の旅団 一行は隣のフィールドへと移動していった。

「と、止めるなでゴザルよ厨二！」

「抑えるゴザル。何があったか知らないけど、殿中でゴザルだぞ。

忠臣蔵には一週間くらい早えだろ」

俺会議がゴザルをなだめにかかる。

普段の言動はアレであるが、仮にもこのメンバーの中では最年長である。

ゴザルの事情がわからない以上、動機に遡って説得することを早々に放棄し、客観的な事態を理由に彼の突撃を思いとどまらせようとする。

「戦力的にも4対6でこつちには回復役はなし。おまけにあの狐耳網タイツは 茶会 のナズナだ。俺らが採算無視で戦っても、勝率4割つてところだろ。確かに俺だってハーレムは妬ましい。けど、下手すりゃ、D・D・D と 西風 の全面戦争だぜ？ やめとけやめと……」

「うおおおお、なんだあのハーレム状態！？ しかも、でっばいちつぱいふつうぱい、百花繚乱よりどりみどりとか！ おっばい独り占めとか許せん！ 殺す！」

「そう、おっぱい独り占めとかマジ許せないと俺会議で有ぞ……え
?。」

聞きなれない声が会話に混じる。

全員が振り返ると、そこにいたのは、まるで西部劇から抜け出てきたようなウエスタンブーツにテンガロンハット、破けたマントにレザーの上下といういでたちのキャラクターだった。

「なあ、お前たちもそう思うだろう！ 我が愛すべき後輩諸君！」

サムズアップの行動をアバターに取らせ、まるで歯がきらりと光
そうな無駄に爽やかな口調でその男は言い切った。

「……誰でゴザルか？」

「俺かい？ 俺は……世界のリア充に嫉妬という名のプレゼントを
配るダンディ・サンタクローズ……」

「……レッド・ジンガー、盗剣士、レベル90」

「ああもうそこステータス画面見て冷静に突っ込むとかイクナイと
思っなお兄さんは！」

「つて、レッド・ジンガー?!」

「……おっぱい二挺拳杖 MAJIDE?!」

「へへ、俺もまだ忘れられてなかったっか。こいつあこそばゆい
ねえ」

「……誰？」

「D・D・Dの初期メンバーだよ。すっげえピーキーな戦い方
をするハイエンドプレイヤーだけど、その……色々アレなことがあ
って、うちを抜けた人だ」

俺会議の言葉に、レッド・ジンガーは深々と頷いた。

「うむ。だが、そんな俺の事情はどうでもいい。要はテメエらがどうしたいかだぞ、後輩諸君。不景気な顔しやがって。いや、皆まで言うな！ わかる、わかるぞっ、こんな日、こんな時間に野郎だけで冒険してるような連中だ！ あのハーレムパーティーを見て何も感ぜずにいられようか！ 否！ 寒さに人肌恋しく冬におっぱいを求めるのが男の摂理！ ギルドがどうした？！ もっと熱くなれよ！ 本気になれば世界が変わる！ 無理を通せば道理がバシルーラ！ 特技はイオナズンですが何か！ あと戦力とか言ってたが、俺が加勢してやるので問題なし！ ……ということだ」

まるで拳銃のような形をした杖を左右に構え、レッドは銃口で帽子のつばを上げた。

「やっちまおう！」

「すまない。レッドさん。さっぱりわけがわからない」

「者ども！ ポケットとしてないでさっさとヤツらを追っでゴザルよ！」

「寝返りMAJIDE!？」

「この方はギルドの初期メンバー、つまりリチョウの旦那やギルドマスターのご友人であらせられるのでゴザルよ！ その方の提案を飲まずにおれようかでゴザル！」

「……どうするよ。厨二、MAJIDE」

「……このままゴザルを一人見捨てるワケにもいくまい。アキバ幕府 ネットからの豹変から察するに、そこそこやむを得ない理由もあると見た。何より」

一旦言葉を止めて、厨二が喉の奥を鳴らした。機嫌が良いときの彼の癖だ。

「……この謎の男に唆されたのであれば、リア充爆破にも、それな

りの大義名分は立とう」

「……奇遇だな。臨時俺会議でも、賛成6、反対4でこの話、乗ると出た」

「おいこらー、テメエら何ぶつぶつ言ってるんだ！ 景気よく行くぞ！ だって今日は、クリスマスなんだぜ……っ！」

無駄に堂々と胸を張り、同じくらいに無駄に説得力に満ちた声で畳みかけるレッド。

理屈も通らず、はっきり言って何を語っているのかもよくわからない。

だが、そこには有無を言わせぬ無駄な勢いがあった。

通常の状態であれば、4人もこの言動をただの戯言として聞き流していただろう。

しかし、世界はクリスマス。独り身たちの被害妄想はピークに達しており、かついつもならばブレーキ役であるはずのユタや三佐さんは不在、ゴザルも何やら珍しくヒートアップ。

立場上他のメンツは抑えに回っているが、6人パーティ中5人が女性という、露骨なまでのハーレム時空を見せられて、嫉妬心頭なのは皆同じ。

まるで表面張力ぎりぎりまで水が注がれたコップに十円玉を放り込むように、レッドの言葉は最後の背中を押すトドメだったのである。

「そうですよねークリスマスでゴザルからな！」

「おーし、行くぞ者ども、ほら、MAJIDEもぼーっとせずに来い！」

「オラッ、サンタクロースのお出ましたあ！」

「てめーらファッキンリア充どもにプレゼントでゴザルーっ！」

「独占禁止おっばい！ 1つくらいよこしやがれーっ！」

明らかに深夜の時間帯特有の悪酔い気味のわけのわからぬテンションに犯された4人のバカ。

その様子を見て、ただ1人少女姿のアバターであるMAJIDEは、あきれたように肩をすくめた。

「……クリスマス バカが5人で インガオホー」

MAJIDEが覚悟を決めたところで、全く益も何もない男達の戦いが始まった。

8冊目「らいとすたっふさんたち爆発する」(前編)(後書き)

キャラクター紹介

セバス・チャン(格闘家LV90)

ざ・らいとすたっふの前衛を支える 格闘家。通称「俺会議」。

「変態にして紳士」を自認しており、脳内に複数の俺人格を並立させて一人共和制をしている単体独立国家生命体(全て自称)。

紳士然としたスーツに身を包み、エネミーに殴る蹴るの暴行を加える様はシユールの一言。

実害がない範囲で事態を引っ掻き回すのが趣味。

格闘家 としては珍しく、単独戦闘よりもパーティ戦における連携を重視する。

9冊目「らいとすたっふさんたち爆発する」(中編)

西風の旅団。

大規模オンラインRPG、エルダー・テイル、日本サーバーにおける戦闘系ギルド。

最近「アキバの街の五大戦闘系ギルド」の末席に名を連ねることとなった、新進気鋭の集団である。

規模としては、D・D・Dに遥かに劣る。

黒剣騎士団のように、成長限界到達を入団条件にする精鋭でもない。

シルバーソードのような我武者羅な攻略方針を貫くわけでもなければ、ホネステイのような、生産系ギルドとの太いパイプを持つわけでもない。

実働メンバーは60名程度。

こうした客観的条件を覆し、彼らは他の先行ギルドに劣らぬ戦果を叩き出し続けていた。

これだけでも十分に異色なこのギルドを、より異端たらしめているのは、その性別比率。

西風の旅団は構成員の9割が女性プレイヤーであるのだ。

かつて、「プレイヤーとキャラクターがいずれも女性であること」を入団条件としたギルドは存在したが、西風の旅団は入団条件に特に性別による規制を設けていない。

そうしたギルドにおいて、この性別構成はもはや異常というべきものだった。

「……さっき叫んでた人達も、手合せ希望だったんじゃないのかなあ」

ポニーテールめいた髪型の小柄な 武士 が、周囲の少女たちに確認するように首をかしげた。

アバター の容姿や高い声から女性と誤解されがちだが、彼はこのパーティの中で唯一の男性。

西風の旅団 のギルドマスター、ソウジロウⅡセタである。

「だとしても、振り返ちにしてやるだけだ。大丈夫、セタ殿。この身に代えてもお守りいたします」

「あー、イサミちゃんずるいつすー！ チカちーだつて強くなつたんつすよ！ ソウジロウさんと一緒に大規模戦闘とか半日耐久グレンデル狩りとか、どんなプレイでもOKつすよー！」

「……ぷ、プレイとか……その、そういうのは、よくないとおもいます……あ、でも、ソウさまが望むなら……… どんな大変なもの……… もありかも……… きゃっ」

「うわーお、ウィルっちだいたーん」

「な……… つ、ひ、卑猥だぞ貴様ら！ 気を引き締める！ 今日是一年で二番目にセタ殿が襲撃を受ける日ではないか！」

「……… で、でも、クリスマス……… ですもん。少しくらいは積極的に……… がんばりますー！」

「そうだそうだーっ。っていうか、イサミちゃんもクリスマスデート、嬉しい癖にー。抽選に参加した時点で期待してなかったなんて言わせないっすー！」

「わ、わたしは！ 親衛隊の一員として、主命を死守すべくだ……… っ」

「ふふ、みんな、ありがとう。こんな日にも一緒に遊んでくれるんだもん、嬉しいよ」

ソウジロウの一言に、パーティメンバーのかしましいやりとりがピタリと止まる。

「ひゃ、ひゃいつ。セタ殿、光栄ですっ」
「うわーい！ ほめてもらっちゃったすよ！ ああ、今の録音しとくんだったす？！」
「……えへへ。わたしの方こそ、しあわせですー……」

そして、返される三者三様の1オクターブ高い声。
音に味覚があるとしたら、ホイップクリームに蜂蜜をかけてこしあんをトッピングしてもなお足りないほどのどろっどろの甘さだろ
う。

無理もない。

西風の旅団 に女性プレイヤーが多い理由はなんとも単純。
その多くが、ギルドマスターであるソウジロウのファンであるからで、そんな彼女達ギルドメンバーにとって、ソウジロウと同じパーティーで冒険する機会はデートじみた一大イベントなのだ。テンションが上がるのも当然というものである。

当然のように、このパーティに所属する3人もまた、理由は違えどもソウジロウに心酔する乙女たちであった。

この甘やかな雰囲気だとえ、このハーレムのパーティに嫉妬した男性プレイヤーからの攻撃を受けるきっかけになると、彼女達は、二流程度のプレイヤーであればソウジロウへのアピール ちらりやたゆん、可憐な悲鳴など、武器はそれぞれだが を意識しながら蹴散らすだけの技量を持っている。

現に、クリスマスのこの日、これまで彼女達は多くの襲撃を跳ね除けていた。

仮にも 西風の旅団 がアキバでも有数のギルドと知って攻撃を仕掛けてくる者たちだ。

当然のように、襲撃者のほとんどは、それなりに腕に覚えのあるプレイヤーばかりである。

しかし、無邪気なハードコアプレイヤーであるソウジロウの隣に

立つべく修練をしたギルドメンバーの少女たちは、多くが一流と読んで差支えないほどの実力を獲得していた。
恋する乙女はゲームであろうと強いのだ。

「いやまあ、若いねえ……。いつものことっちゃいつものことだけだよ」

「やはり、クリスマスというのが効いているのだろうね。彼女たちの甘さも三割増しだ。これを当然のようにいなすんだから、ソウジ君の方もソウジ君だけれどね。で、君も混ざりたいんじゃないのかい？」

「あたしは、帰ってからたっぷりとね。ほら、ここであたしが出張つちまったら、あの子らの出る幕がなくなるからさ」

「へえ、大した自信だね」

「そう思わなくちゃ、やってらんないんだよ。分が悪い賭けは嫌いじゃないしね。……で、だ」

ギルドマスターとメンバーのやりとりを聞き流しつつ、狐尾族の神祇官が後ろを見やった。

先ほど、男性プレイヤーグループから声をかけられた方向だ。

「……紫陽花^{アジサイ}、どう思う？ さっきの、D・D・Dの若い衆じやなかったかい？ あそこは規律がしっかりしてるイメージだけだよ。嫉妬心に駆られて突撃してくるかね」

「ああ。あの中で一人は知り合いだ。狐猿……その子は少なくとも明確な理由もなしに問答無用の殴り込みをかけるような馬鹿ではないはずだよ」

「珍しいじゃないか。男嫌いのアンタが、野郎にマシな評価を下すなんてさ」

「嫌いだよ。ただ、あの子とは少し因縁があってね」

気怠げな様子で答えを返す紫陽花と呼ばれた少女は、黒髪の 召喚師。

灰色のローブに無骨な長杖と、ゲームとしてはひどく地味な格好で装備をまとめている。

丈が短く、脚の大きく露出した着物という、極めてキャッチーな格好をした 神祇官 とは対照的だった。

彼女は杖を振るうと、デュラハン 無首騎士 を召喚した。

明確な戦闘準備である。

「……はあ。ほら、ソウジっ、他の子らも！ また襲撃がありそうだよ、警戒しなっ！」

神祇官 は盛大にため息をつき、周囲の少女たちに声をかけた。

「いよいよですねっ！」

「了解っす。ソウジロウさん、チカチーの活躍と、あとちらりずむを目に焼き付けるっすよ！」

「……うう。わたし、イサミさんやナズナさんみたいに揺れないし、チカちゃんやナズナさんみたいにスカートの裾も短くないし……装備変えればよかったかなあ……」

「ば……っ、そんなことを言っている場合か、貴様ら！」

賑やかな反応だが、仮にも新進気鋭の戦闘系ギルド。行動は迅速である。

全員が全方位を視界に入れるよう、位置取りを行った。

「たく。言ってることとやってることは統一してくれないかい、参謀さん」

「矛盾はしてないさ。あの子は明確な理由もなしに殴り込みはかけない。かけるんだったら、本気になるだけの理由があり、そして勝

利するだけの方策を練ってくる。そういう子だったこと」

「……またわけのわかんないことを……。まあ、あなたの言動は今に始まったこつちやないけどさ。で、リソースは大丈夫かい？ あんたにやウィルの 瞑想のノクターン が効かないんだから」

「あと一戦くらいなら。最悪、一回召喚術を使えば、僕の役目は遂げられ……」

「セタ殿！ 敵だ！」

瞬間、少女たちの眼前に、小柄なエネミーが「出現」した。

通常の発生^{ポップ}ではない。

特殊能力で姿を隠していたものが攻撃状態になり、視認できるようになったのだ。

出現したエネミーが緑色の輝きを放つのと、剣閃が放たれるのが同時。

西風の旅団 のパーティ全員が緑の光に包まれ、両断されたエネミーが消滅する。

「間に合わなかったか。ごめんね、みんな」

「……そ、そんなこと……ありませんっ」

「そつつす！ あの反応、さすがソウ様っす！ そこに痺れる憧れるっす！」

「皆、油断するな！」

「あー、イサムちゃん、混ぜられないからって嫉妬してるっすー」

「ち、違っ！ 断じてそのようなことはない！ ほら、皆状態異常^{バーステ}を受けているだろうが！」

刀を振るったのはソウジロウだ。

突然の襲撃に対し、状況を分析するよりも先に動き出す即応性は、彼の真骨頂である。

だが、彼の刀よりも先に、エネミーは自分の役割を果たしていた。

エネミーは消滅しても、毒々しい緑の輝きはなおも全員を包んでいる。

「紫陽花さん、これは何つつすか!？」

「敵襲だ。悪戯鬼精^{グレムリン}は、このフィールドに登場しない。敵に召喚術が使える者がいるね」

西風の旅団の参謀役、紫陽花の思考が回転する。

今、ソウジロウが斬ったのは、悪戯鬼精^{グレムリン}。低レベルの召喚魔法で呼び出すことのできるモンスターで、姿を消す特殊能力と、アンラックという魔法を使う。

アンラックの効果は、幸運値を一時的に下げる状態異常^{バッドステータス}、不幸を対象に付与すること。

具体的な影響としては、クリティカル率の低下、幸運値に応じて確率発動する特技や武器の特殊能力発動率の低下。呪詛関係のエネミー特殊能力を受ける可能性の上昇といったものである。

直接的な影響は低いが、持続時間が長く、高レベルの状態異常回復魔法か一部のアイテムでしか解除することができないという、嫌がらせとしての側面が強い状態異常だ。

「不幸、消すかい？」

「いらぬ。ナズナの魔法はもつと致命的な状態異常^{バッドステータス}に備えて温存。全員ナズナ君を囲んで密集」

「……悪戯鬼精の方向に術師がいるんじゃ……」

「いや、そっちには誰もいませんでしたよ。草の揺れ方も普通でした。隠密の線もないと思います」

「ソウジロウ君が視認できなかったなら何も無いな。そっち以外を警戒して」

「了解した!」

西風の旅団 のパーティメンバーは、 武士 が2人に、 吟遊詩人、 盗剣士、 神祇官、 召喚術師。

このうち、 召喚術師 の紫陽花は、前衛にも対応した特殊なキヤラクターである。

よって、襲撃に備えるうえでとるのは、円形の布陣。

パーティ唯一の回復系職業である 神祇官、ナズナを囲む、セオリー通りの隊形だ。

「さっきの人たちでしょうか！ みんないい動きしてましたよね。多分、今日一番の強敵ですよ。楽しみだなあ」

「あの距離で動きとか観察できるのは、ソウジくらいだよ」

「まあ、ぎりぎりの戦いがしたいならうってつけの相手だろうね」

屈託なく声を弾ませる彼に、ナズナと紫陽花は毒気を抜かれたように笑い声を上げた。

この襲撃も、ソウジロウにとっては「ゲームの楽しみ方」の一つ。心底、この少年は エルダー・テイル を満喫しているのである。

「ところで、紫陽花。さっきの連中に、サモナー 召喚術師 なんていなかったと思っただけど」

「ああ、いなかったね」

「誰かが おなかま 狐尾族 って可能性は？」

「ないね。今の 悪戯鬼精 には ロングレンジ・サモン 遠距離召喚 がかかったた。

狐尾族 でそんなに都合よくシナジーをする特技を拾ってくるような豪運が、2人もいたらたまらないよ」

「てーと、可能性は」

「伏兵か、あるいは……」

紫陽花が一つの仮説について言及しようとした、その瞬間。

全員の視界が、白に染まった。

同時に響き渡る、野太い男達の声。

「ほーら！ こいつが本当のホワイトクリスマスだーっ！ クリスマスに可愛い彼女ほしいとかお願いしてもサンタさんはくれないんだぜーっ！」

「メリー苦しみますでゴザルー！」

「七つの大罪が一、姦淫に今、白の……断罪を！」

「男としてのオレ！ 社会人としての俺！ ゲーマーとしてのORE！ 三つの自分が全会一致で貴様を有罪だと告げているー！」

「人としてのジレンマ皆無MAJIDE!？」

「^{ヤケ}自暴自棄になったような馬鹿丸出しの声、四方から取り囲むように近づいてくる。」

「^{ディープミスト}濃霧の結界 だ！ 不意打ちに気をつけな！」

「なるほど、これで僕の力を削ぐわけですね。ああ、だから不幸の状態異常かあ。やりますねっ！」

「……でも、視界を塞いだのに、声あげて突撃……意味ないような……」

「馬鹿つすねー。盛大に」

「だ、だから油断するなっ」

ソウジロウの歓声を聞きながら、紫陽花は相手の次の出方を推測する。

今、周囲の視界を塞いでいるのは ^{ディープミスト}濃霧の結界。

^{ドリフト}森呪遣い が習得できる魔法の一つで、周囲の広い範囲を濃い霧で覆うものだ。

敵の視界……モニター画面の映像に干渉する系統の魔法はいくつが存在するが、濃霧の結界の特徴は主に2つ。

直接敵の視界を魔法で封じる魔法とは違い、敵味方に関係なく作

用すること。

そして、対象に対して状態異常を付与するのではなく、エリアに対して魔法を使用するため、回復職の状態異常回復系特技で効果を打ち消すことができないことである。

この霧の中では、敵を捕捉できる範囲が極端に狭まり、実質的に遠距離からの射撃攻撃、魔法攻撃は命中精度が極端に低下する。

通常であれば、濃霧の結界は無差別に効果を及ぼすため、敵味方ともにデメリットは同じだ。

しかし、この視覚ペナルティを打ち消す方法は、少ないながら存在する。

一つは、種族特性。

エルダー・テイルのプレイヤーキャラクターが選択できる8種族のうち、法儀族は魔力視覚と呼ばれる種族特技を持つ。

この特技を使用すると、キャラクターはMPが存在する生物を、物理的障害物を無視して輝きとして視認できる。

もう一つは、高レベルの消耗アイテムである、視覚へのあらゆるペナルティを打ち消す エルダー・フェアリーバーム 大妖精の軟膏の使用。

相手がいずれかの手段を確保していた場合には、こちらが一方的に狙撃を受けることとなる。

そして、何よりの懸念。

多くの攻め方のうち、この方策を選んだということは、敵はソウジロウの「目」の脅威を認識しているということ。

そうであれば、今後も、彼の特性を潰す方向で戦術を構築しているに違いない。

付与術師ならば、魔法そのものを打ち消すことも可能だが、ないものねだりをしては仕方ない。

多少の被害は覚悟して、強硬突破もやむなしか。そう、紫陽花が指示を出そうとした、そのとき。

「……あれ？ 攻撃が届かないでゴザルよ!？」

「ちょ……あ！ 緑に光ってるから敵の方向はわかるけど距離感とか全然掴めねえ！」

「これが……五里霧中というものか……っ」

「自爆風味MAJIDE!？」

盛大な攻撃の空振り効果音が周囲で響きわたった。

これでは、全く霧に隠れて隠密している意味がない。

少なくとも、その方向を向いているメンバーからは、容易に敵を捕捉できる。

「……あの。これ、盛大に、墓穴を掘ってます？」

「……マジお馬鹿さんっすね」

「だ、だから油断してはいかんと……ぷぷっ」

「よし、んじゃ、逆にこっちから不意打ちっすよ！ チカチー突貫するっす！」

「確かに勝機。私も、迎撃に回る！」

「……わ、わかりました……わたしも……」

「お、おい、ちょっと待て！」

ナズナの制止も聞かず、パーティの若手三人が霧の中へと駆け出した。

「……ソウジロウ、紫陽花、どう思う？」

「畏でしょうねー」

「畏だね」

「だったらあの娘ら、止めてもらえるとありがたいんだけどねえ」

「悪びれもせずに答える2人。」

ナズナは今日何度目になるかわからない盛大なため息をついた。

「ごめんなさい。ただ、警戒を緩めたら、撃ち抜かれてしまいそうだから……ねっ！」

突如、霧を裂いて飛来した火球を、ソウジロウが刀で一閃する。

武士 の特技の一つ、 矢斬り 。

飛び道具を切り払うこの特技は、奥伝以上に習熟することで攻撃魔法にも効果を発揮する。

霧の向こうから飛来した弾丸への反応と対応。

しかし、そこに感心する間もない。三人は武器を構え、火球が射出された方向に向き直った。

霧の中から現れたのは、テンガロンハットに銃めいた武器を左右に構えた長身の男。

芝居がかった物腰で武器をソウジロウに突き付けると、彼は悠々と名乗りを上げた。

「ドーム、ソウジロウさん。リア充スレイヤー、レッド・ザ・テンチューです。リア充爆発すべし」

「……つたく。こういうのは紳士のやり口じゃないんだけどなあ」
「な、なにをぶつぶつと！ きちんと勝負しろPK！ プレイヤーキラー そもそも攻めてきたのは貴様だろうが！」

目の前で剣を振るう 武士 の少女の二刀流攻撃を 格闘家 ならではの回避率でやりすごしながら、襲撃者の一人、 D・D・D の「俺会議」こと、セバスは一人ごちた。

西風の旅団 のギルドマスター、ソウジロウを強者たらしめているのはその目の良さ。

西風の旅団 のギルドメンバーを精強たらしめているのは、同じ目的意識下で培われた連携。

この長所を潰すため、濃霧の結界 で視界を封じ、一対一の状況を作り出して、個々を無力化した上でソウジロウを叩く。

これが、D・D・D のOBであるレッド・ジンガーの情報を元に、ゴザルが決定した戦法だった。

レッドが召喚したグレムリンの アンラック のおかげで、敵は発光しており、霧の中でもよく目立つ。

また、濃霧の結界 の効果下であっても、法儀族 である厨二は視界を確保できる。

索敵能力は襲撃側に圧倒的な分があった。

あとは各個撃破に持ち込むべく、敵を引き寄せるだけ。そして、それは見事に成功した。

「んなこと言っても……ほら。やる気がでないっちゅうか？ 俺会議も牛歩戦術で停滞気味な感じ？」

「わ、訳のわからないことを！」

そう。敵の前で攻撃の空振りをしたのは、ブラフ。

目的はあえて陣の中心から離れた襲撃者の位置を知らせ、相手を移動させること。

敵が散開せずとも、霧の中で移動すれば隊列が乱れる。そこを分断する予定だったが、相手は見事にはらばらに行動してくれた。

賢明ではない判断だが、意図はわかる。

わかるだけに、俺会議は一生懸命にこちらを追いかけて攻撃してくる少女の前に、げんなりとした気分になっていた。

「……だってさー、好きな男の前でいいカッコしたいとか、可愛い

「じゃねえかちくしょう!」

「へ、へんなことを言うな! わたしはセタ殿の親衛隊として、職務を全うしているだけだ! べ、別にクリスマスと一緒に過ごせて幸せだったりということはあんまりない!」

「うわーすげー勢いで語るに落ちた^{ハンジ}」

「う、うるさいうるさい、うるさい!」

武士の少女が二刀を振るう勢いが加速する。

回避率を上げる ファントム・ステップ、防御力を上げる アイアンリノ・スタンス を併用し、セルフ・ヒーリング での自己回復。生存能力の高い 格闘家 の見本のような俺会議の戦いぶりだが、それをも少女の剣撃は押し切らんとする。

一般に、男性プレイヤーがゲームに「成長」と「強さ」を求めるのに対し、女性プレイヤーは「関係性」を求めることが多いと、俺会議は考えていた。

しかし、目の前の少女の特技の連携、位置取りといった動きは、間違いなく生真面目に「力」を求めて努力を積み上げた結果だ。

その動機がどんなものかは考えるだけで胸焼けがしそうだったが。

「くそ、そんな大技連発しやがって、死ぬ! 死ぬ!」

「当然だ! 倒す気でやっている! 貴様もPKならPKらしく、逃げてばかりではなく反撃してこい!」

「ぶほーっ!? すっげー怒った! くそ、でもクリスマスにこうして可愛いおにやのこと2人追いかけることか、ある意味俺リア充認定じゃね? とか脳内査問会議にかけられそうなテスト!」

「貴様、日本語でしゃべれっ! あと、か、か、かわいいとか初対面の女にたやすく言うな! 軟派男めがっ!」

俺会議の台詞の半分は、心からの本心だ。

そして、残り半分は、データによらない相手プレイヤーの冷静さ

を奪い、敵愾心ヘイトを高めるための、特技によらない挑発リアル・タウント会話。

ソウジロウと思われる緑の光からはある程度の距離がとれた。
二刀の少女が、立ち止まった俺会議に対して、剣閃を放つ。

(……くそ、好みの娘さんが他人のハーレムの一員で殴らないといけないとか、どんだけマニアックなヤツ限定のご褒美シチュだよ！俺にや罰ゲーム以外の何物でもないんだけどな！)

そこに、躊躇なく踏み込み、俺会議は戦いを終えるための、カウンターを放った。

少女は思いのほか優秀なプレイヤーだ。HPを削りきる勝利は難しい。

だが、元より俺会議の勝利条件は、眼前の敵を倒すことではない。

選択した特技は、 スタニング・ブロー。

「うひゃん?!」

四種類の方向への高速移動に派生する ダッド・ステップ で接近してからの ナーブスラッシュ。

霧の中からの不意打ちは、見事に 西風の旅団 の 盗剣士 に、僅かなダメージと、攻撃力低下の性能デバフ低下を与えていた。

先制攻撃を成功させたのは、同じ 盗剣士 、 D・D・D の MAJIDEことアラクスミ。

「ふ、不意打ちとは卑怯っすよー！ とかいいつつ喋りながら攻撃

「ちょやーっ！」
「……………」

反撃の斧を、盗剣士の移動系特技、ヴォルトの無敵時間でやり過ごす。

突撃してきた相手の肩に手をつき、空中を一回転するアクロバティックな動き。

そのまま、背後をとった少女に、MAJIDEはナイフを振るう。ヴァイパー・ストラッシュ。ダメージは低いが、敵の命中率低下を引き起こす特技だ。

MAJIDEに対峙する少女は、左右の手に斧を構えたドワーフの盗剣士。

日本サーバーでは珍しい、ツイン・トマホークと呼ばれる構成だった。

同じ盗剣士であっても、装備する武器によってその特性は大きく異なる。

MAJIDEは盗剣士の中でも最高の攻撃速度を誇る短剣ツイ二刀流ン・タカ。

手数で相手の攻撃のチャンスをつぶし、ダメージよりも敵の性能バ低下に特化した、搦め手を得意とするタイプである。

対して、ツイン・トマホーク斧二刀流は、攻撃力に特化したタイプ。

攻撃速度の違いでMAJIDEが優勢なように見えるが、左右の斧が命中すれば、たちまちに状況は逆転するだろう。

「なんとか言ったらどうですかー！ っていうか、アンタ女じゃないですか！ なんてこんな嫉妬魔神の野郎どもに味方するんっすかーっ？」

「……………」

ふるふる、と首を横に振り、MAJIDEは再び距離を詰める。

幼い声と、何よりくるくる回る感情が乗った口調。

ロールのせいもあるだろうが、相手の少女はまだ若いプレイヤーだろう。

コケティッシュな言動は、フリーで活動していれば、引く手数多に違いない。

こんな少女まで ^{ハーレム}西風の旅団の一員か。

元から基本的にはダウナーなMAJIDEのテンションが、盛大にデフレーションを引きおこす。

「きちんとしゃべるっすよ！ 無口系キャラとか、ロールプレイヤーさんでもどうかと思うっすといいつつ、くらっつす！ とまほお おおおくつ、ぶううううめらんっ！」

小さな身体をぐるぐると回転させて、少女は片手の斧を投擲した。しかし、斧での攻撃は準備動作モーションが大きい。悠々とMAJIDEはそれを回避し、片手の武器を失った少女へと接近して……

「あまーいっすー！」

耳障りな音とともに、急速に減少していく自分のHPゲージを確認した。

そして、「背後から自分の身体を切り裂いた」斧が、少女の手元へと戻っていく。

背後からの攻撃の影響で、MAJIDEの身体が少女の方向へとよろめく。

無防備な身体を、左右の斧が切り裂いた。

見る間に危険域へと減少するHP。

「言っただつすよ？ トマホーク『ブーメラン』って」

そんなことはMAJIDEも知っている。

少女が使ったのは ブーメラン・スロー。

武器を投擲する特技だが、投げても一定時間後に使用者の手元に武器が戻ってくる。

しかし、投げた武器に攻撃判定……ダメージが発生するのは、投擲してから数秒間で、少なくとも「使用者の手元に戻ってくる間」はダメージが発生しないはずだ。

だが事実として、MAJIDEのHPはごっそりと削り取られていた。

考えられるとすれば、レア武器による特技性能の変更。

少女が手にしている斧は、色違いだが対になるような意匠の武器だ。おそらくはこれが、ブーメラン・スロー の性能を強化しているのだろう。

対の武器は互いに引き合い、故に戻ってくる斧の勢いを強化する、というような設定で。

「ほーら、人のデートを邪魔するようなヤツには天罰がくだるっす！ 今なら同じ女のよしみ、トドメまでは刺さないでやってやってもいいっすよ！」

だが。隠し玉を温存しているのはまた、MAJIDEも同じ。

追撃を加えようとした少女の一撃の攻撃範囲から、突如加速した動きで回避する。

「つて……あ、しまったー!? 削りすぎたっす!？」

その身体には赤に輝くエフェクト。

レッド・シューズ
赤い靴。

HPが一定以下になったときに使用可能な、盗剣士の自己強化特技。

あらゆる行為の動作を高速化する、一発逆転を狙うための切り札

だった。

「……すまん」

「え？ し、渋っ！ 何そのハスキーボイス！ アンタ、ネカマさんつか！？ マジで?!」

「……MAJIDE」

少女の叫びに、こくりと頷き。

赤い輝きをまとったMAJIDEのグルカナイフが無数の軌跡を描き出す。

「……えと、イフリート山崎さん……でしたっけ？」

「だぐはっ!?!」

目論み通り 西風の旅団 と一対一になった厨二こと、クーゲルは、のっけから思わぬ致命傷を喰らっていた。

「ちつがああああう！ 俺はクーゲル！ ライス・フレイム 憤怒の魔炎 のクーゲ

ルと呼びたまえ！ あと、イフリートってどこから出てきた!?!」

「……ひうつ、ぐ、ごめんなさいっ。で、でもさつき、お連れの方が、親しげに「ザキヤマ」と呼んでらし」

「だあかあああああっ！ クーゲル！ クーゲル・ザ・シュライパー 魔狩人

「!」

小動物めいたおどおどとした口調の少女は、吟遊詩人 であるらしい。

吟遊詩人 に攻撃系の特技はほとんど存在しない。

そのため、法儀族 かつ 妖術師 という極めてHPの低い厨二でも対応は可能だったが、何よりその発言のダメージの方が、プレイヤーの心に突き刺さっていた。

「……ああ！ ぼ、ぼーるぺんさんですか！」

「……なんだ、それは」

「ふえ？ クーゲル・シュライバーって、ドイツ語でボールペンって意味じゃないですか。あと、ザは英語なんで、くーげる・ざ・しゅらいばーは変だと思えます……」

「なん……だと……？」

攻撃を回避し続けていた厨二の動きが硬直する。

意識が真っ白になるのを、厨二は止めることができなかった。

「……く、クーゲルが「玉」で、シュライバーが「書くもの」で……

……あれ？ だ、大丈夫ですか？ 止まってたら叩いちゃいますよ？

えいつ、てやっ」

この名前は厨二がドイツ語専攻の友人に、ドイツ風の名前を幾つか挙げさせて選んだものだ。

それが、ボールペン。

これでは、バカ丸出しではないか。

いや、百歩譲ってバカ丸出しまではいい。

しかし。

眼前、その事実を指摘したのが、よりもよって、天然系おどおど女子という、彼のストライクゾーンからすれば割とど真ん中の存在であることが彼の受ける精神的ダメージを最大のものとしていた。

「ふおおおおおおおおお！？」

厨二は激怒した。必ずや邪知暴虐のドイツ語専攻の友人を除かねばならぬと決意した。

厨二はこれで繊細である。自分の美学を貫いている分には何を言われようと跳ね除ける精神力があつたが、自分のシンプルな誤りに対する恥ずかしさと照れには人一倍に敏感であつた。

脳内イメージ的に、厨二は、いまは、ほとんど全裸体であつた。それくらい、恥部丸出しの心境であつた。

可能であればセリヌンティウスのところまで爆走してしまいたい心境であつた。

しかし、

「ひつ？！ ご、ごめんなさいごめんなさい！ 何か悪いこと言つてしまったでしょうか、ボールペンさん……っ」

ボールペン
繊細な心がぼきりと音を立てて折れかける。

しかし、厨二は耐えた。ここで折れるわけにはいかない。

思い出すのは、リアル中学二年生のころ、図書館で読んだ小説の主人公。

なんだか知らないけど意地張つて友達を人質にしたアレなところはあるけれど、友人のために最後まで命を張つた走る青年の物語。

「ま、負けん！ 負けんぞおおお！ ボールペンになど！ 燃え上がれ俺の 憤怒ライス・フレイムの魔炎！」

「ひゃい！？ な、なんですか突然っ？」

ゴザルの作戦に従うならば、ぎりぎりまでこの娘さんを、姦淫強欲のハーレムマスターから引き離さねばならぬ。あとは、タイミン
グ。この作戦は、厨二の魔法が要。

詳しいことは知らないが、あの飄々としたゴザルがソウジロウを

襲撃すると決めたのだ。

ならば、自分はそれを全力で手伝う。そこになんの躊躇いがあるうか。

そう。厨二は、いつも世話をかけている友を救うために戦うのだ。ハーレムマスターの姦淫強欲を打ち破るために戦うのだ。

さらば、小動物系天然娘さん。若い厨二は、つらかった。幾度か、心折れそうになった。えい、えいと大声挙げて自分を叱りながら攻撃をかいくぐった。

弱体化魔法で応戦しながら、一步、一步と後退する。

そして。

ゴザルからの合図が、プライベートメッセージで告げられる。

心を奮い立たせるように、厨二は、自分の心を支えた作品の名を叫んだ。

「俺に力を！ 走れエロスーっ！」

そして、噛んだ。

「……あー……そ、それは、ちょっと……ごめんなさい……。通報されても仕方ない気が……」

どん引かれた。

「……むがああああああ！　アラクニッド・ネスト　ーっ！

！」

かくて、厨二の血を吐くような慟哭が響き渡った。

9冊目「らいとすたっふさんたち爆発する」(中編)(後書き)

キャラクター紹介

クーゲル「シュライバー(妖術師LV90)

ざ・らいとすたっふの火力担当である 妖術師 。通称「厨二」。
神の怒りが具現した存在である 憤怒の魔炎 を自在に操る術師
(という脳内設定)。

悪の魔法使い然とした黒マントに身を包み、とりあえず知っている
中で難解な単語をつなぎ合わせて会話する様から、厨二の名が
ついた。

趣味と言動はアレであるが、実は友人思いであるらしい。

ただでさえHPの低い種族 法儀族 で、自分のHPが減らない
と真価を発揮しない魔法を主力として使うという生粋の趣味人。

単純なゲーマーとしての腕は D・D・D 内でもトップクラス。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2271w/>

D . D . D 日誌

2012年1月9日00時55分発行